

地震

四谷區 第一尋常小學校

第三學年男

相島 正夫

九月はじめの

大地震

きゆうにおこる

大地震

どこの家でも

大さわぎ

外へ出る人

かける人

又々地震が

ゆつてくる

そのまに火じが

はじまつて

自動車ぼんぷは

うなつてる

だんく火じが

ひろがつて

いよくあぶなく

なつてきた

向島へ

にげていく

向島は

そのうちだんく

やけてきて

あつくて

たまたらぬと

みんな川へ

飛びこんで

中にはしぬ人

およぐ人

川の中では

人々は

たすけてくれと

さげんでる

それでもたすける

人はなし

ああかはいさうに

なりました

大正十二年の大地震とおほ火事

四谷區 第一尋常小學校

第三學年女

佐々木

きのえ

あの地震は實におどろきました。私が弟と近所へ行つて歸つて来て、お母さんが、弟の手を洗つて居ますと、ガタガタとゆれて來ました。

私はおどろきました。お父さんは少しかげんが、悪くておざしきに、ねておました。兄さんも姉さんも、二かいにめました。お父さんは飛起きて「あぶない」とさけびました。お母さんはお勝手に弟をだいてごろごろして居ります。屋根からはかはらや、石などがたくさん落ちて來ました。

今度は新宿に火事が出た、又どこからもどこからも、大火になりました、實にこわうございました。いよゝ晩になりました、地震はやみません。近所の寺の廣い門内に三四日、家内中でひなんをいたしました。天皇陛下のあつのおめぐみをたまはり又他國の御同情により、今日まで無事に學校でべんきやうをいたすことができます。

この御恩はながくわすれずに、きつとかへさなければなりません。

僕はこんな東京にしたい

四谷區 第二尋常小學校
第三學年男 水津文雄 (十一歳)

あの九月一日のおそろしかつた大地震と大火事で半分すぎも焼けてしまつた東京は今バラックばかりです。

いつまでもこんなでは日本のはぢだから、これからは地震があつてもつぶれない火事があつても焼けないやうな家をこしらへなければならぬと思ふ。

しかし、僕にはどんな風にこしらへてよいか分らないが僕は火事のためには飛行船消防隊をつくつておいてそら火事といふ時にはこの消防隊がすぐ飛び出して大雨の降るやうに水をかけたらよいと思ふ。

又乗合飛行機でもたくさんこしらへていざといふ時には誰でも乗つてどん／＼にげて行くことが出来るやうにしたい。

その外避難所を方々につくり下はコンクリート二尺ぐらゐのふかさにして石綿スレ

ートで屋根でも造つておいたらよいと思ふ。ふだんはそこにぶらんこでもつくり遊べるやうにして、中にはいくらでも水の出る所をこしらへておきたい。

それから川をたくさんつくりじやうき船をたくさんうかべておいてそれでどん／＼にげられるやうにしておきたい。電車は飛行機みたいに羽をつけておいて、空中も走ることが出来るやうにしておきたい。

僕はかうして早く前よりもゾット／＼立ばな東京にしたいと思つてゐる。

大東京

四谷區 第二尋常小學校

第三學年女 田中玉榮 (十一歳)

(一)

地震でつぶれた東京市

火事でもされた東京市

四谷は地震でつぶれずに

火事でもそんなにやけないが

四谷區

下町あたりは大へんだ

四谷おれどどこからどこまでやけ野原

(二二)

それでも大工のおさんが

夜まで本氣にはたらい

ずん／＼お家をたてゝゐる

いつになつたら東京が

大東京になるかしら

二十年くらゐかゝるかな

(二三)

それともぢきに出来るかな

大東京が出来たなら

浅草花やしきも出来るでせう

おさるのしばゐも見られます

犬の玉のりもおもしろい

早くこい／＼大東京

僕は犬

四谷區 第三尋常小學校

第三學年男

菊田直二

僕は犬である。さて、これから私の身の上を御話しやう。

僕は元のら犬であつた、母と兄と姉と僕の四人ぐらしだつた。或日、みのたけ六尺ぐらゐの男が二尺ぐらゐのぼうをもつて、僕たちをぶんなぐつた。母や兄たちは足が早いからすぐどこかへいつてしまつた。僕はさんざんなぐられたあげく、どぶの中へぶちこめられた。そして二日二晩どぶの中へいつて、しにさうになつた。ところがこれがかみほとけ、學校のかへり道のわんぱく少年、耳をひつばつてあげてくれた。むこうは、いたづらかもしらないが、こつちはうれしい、ながく、どろ水の中に居て、上つたのだからいゝ氣もちだ、何だつて、たとへやうがない。すると、或日、大人の人かきて「太郎よこいこい」とよんだ、僕は大人の人がよぶなんて、おかしくて、たまらないが、ちゝをひねつて、わらひをとめた、そしてその男の人の所へいつた。その

男はパンをくれた。ひさしぶりで、どぶの中から上つて五日目にパンにありついた。僕は一しやうけんめいにそのパンをたべた。その人はみんなたべてしまふと僕をだいてあゆみだした。家へくるとおくさんが「まあ、かはい、犬ねどこでつれてきたの」といつた。おくさんはおくさんらしい、そして、その日はねてしまつた。僕はさむいので、犬なきに「クンクン」とないた、するとぐつすりねて居たと思つたおくさんが、おきてきてだいてねた。ふとんはなるほどあたたかい。それからしつれいな話ではあるが、僕は小べんが出たくなつた、それでこそつと、おきて、ざしきのすみへした。そして神様へいのつたが朝、おきた時におくさんにみつけられた、神様はおき、にならないのかしらん。それはそうとおくさんはおきて、小便をした所を見て「お前はしょうがないこだね、どうしてこゝにした」と手のひらでポンポンぶつた。すると、男はおきて来て、とめてくれた。その時おくさんが「あなたこの犬はしょうのない犬ね」といつて、それから、上へあがれなくなつた、その時から、その男はあなたといふ名前だとわかつた。

かなりや

四谷區 第三尋常小學校

第三學年女

佐藤隆子

私のうちにはかなりやが二羽居ました。私が朝起る頃にはいつでもかあいらしい聲でなきながらかごの中を飛び廻つて遊んでゐます。

私がおさをやりに行くと、チイチイチュライと黄色いつばさをばたばたさせて喜びます。そして小さな目で私の顔を見てさもうれしさうにえさをたべます。

かはい、かなりやのえさがなくなると、いつでも私が買ひに行くのです。

或日えさをやりに行つてかごの戸をあけました。その時二羽居たかなりやが一羽に上げていつてしまひました。後にこのつた一羽のかなりやはどんなにさびしいでせう。でもおせいよくないのでそんなにさびしいやうには見えませんでした。

それからいく日か日が立ちました。或朝えをやりに行くと、かごの戸があいてゐてかあい、かなりやのすがたが見えませんでした。あの可愛いかなりやはどこへいつたのでせう。今はどこへいつてどうしてその日を

おくつてゐるのか心配でたびたびかなりやのゆめを見ることもあります。あの可愛い可愛いかなりやは、もうかごの中へはかへらないのでせうか。

バラツクにゐる友へ

四谷區 第四尋常小學校
第三學年男 野邊地勝武

御手紙をさし上げます。

去年の九月一日の大震災でひどい目にあはされてバラツクにお住みになつていらつしやる事は、ぼくはまことにお氣の毒でたまりません、ぼくたちがたくさんのおふとんに、入つてゐる時でも北風が家に吹きこんでくる時などは、なほさらお寒いでせうとおもひます、何もかも御不自由の事がたくさんだとおもひまして御氣の毒です、紙や鉛筆などは御不自由ではありませんか、御えんりようなく、あつしやつて下さい、學校の道具がありませんならお分けいたします、大人の方は復こらしなければならぬいと一生けんめいにはたらいてゐますから前よりもよい東京が出来るでせう、ぼくらも出来るだけべんきやうして、大人にまけないやうにしようではありませんか、そし

て日本のためにつくしませう、日曜日あたりにぼくの方へ遊びにいらつしやい、いろいろのお話もいたしませう。

バラツクに居る友達に送る

四谷區 第四尋常小學校
第三學年女 飯島千代

大へんお寒うございますがおかはりもございませんか。お伺ひいたします。去年の大地震のため、下町の方面はやけてしまひ、あなたもやけだされて、バラツクのおすまゐ、私などは山の手に住ちおかげでやけませんでしたがらぶらぶらうれしうございました。

バラツクはかべなんかなくて屋根はとたんですかららぶらぶらお寒いでせうね。その上ふじゆうでせうね。私はバラツクにゐらつしやる方のことを思ふと、ほんとにお氣の毒と思ひます。お寒うございますからおからだを御大切になさいませ。

さよなら。

地震

四谷區 第五尋常小學校

第三學年男

山田隆三

十五日の地震はわり合に大きかつた。その朝僕が六疊でねてゐると急に地震が来て「あつ」と言ふ間もなくたんすの上にあつたおばあさんのはりばこやたばこぼんなどがあつこつてきたので僕はびつくりした。その時そばにゐたお父さんはまくらもとにいたかいちうでんきを持つてうらの戸をあけて僕とおばあさんを外へ出してくれた。あとへのこつたのはお母さんとねえさんとお父さんと兄さんの四人だけだつた。僕は外へ出て見ると家のとなりのをばさんやをじさんなどが一所に出てゐてまつさをな顔をしてみんなと話をしてゐた少したつて僕はおばあさんと一所に家へかへつて来ておつこつたはりばこやたばこぼんなどをかたづけした。ごはんを食べてからすぐ學校へ来て見た。どうれいだいの所で大勢のものがみんな地震の話をしてゐた。その日は學校のおけいこがお休みになつたので校長先生のお話を聞いて家へかへつた。

大地しん

四谷區 第五尋常小學校

第三學年女

松井八枝子

九月一日は、おそろしい日でありました。ごうごうといふ音がすると、天も地も一時にくづれるかと思ふやうにゆれだして、戸しやじははづれるかべはおちるかばらはとぶ、それはそれは居ても立つても居られないほどおそろしうございました。東の方の空を見るとゆうどう雲がむくむくとわきだして来て、南のはしから北の方へだんだんひろがつていく、それが東京の半分以上を焼きつくした火や煙であつたとは氣はつきませんでした。四五日たつてお父さんに連れられて、焼けあとの見物をいたしました。あんなにきれいであつた町も家も皆な無くなつて、行き來する人々のすがたはまるで田舎の人のしごとぎをきた様にきたなくなつてゐます。あはれな子供たちのお父さんやお母さんに連れられて行くのを見た時には、なんだ

かかなしくなりました。

九月一日の大地震

四谷區 鮫橋尋常小學校

第三學年男

川 口 良 三 (十一歳)

去年の九月一日は、大そう大きな地震がありました。あの日はいやな日でありました。私は學校で式をすまして、家へかへつてきて、ひるごはんをいただいてから、こつぶを持つてきて弟と氷屋に行つて、あそんでおりました。その中に大きな地震がらくとゆれてきたと思ふと、はうくの家はみりくとうごぎ出しました。

おどろいて裏へにげますと、よその人が戸をひいてくれました。その上につていと、二度目の地震でその戸の下のはうが、一寸ばかりわれました。こんどはおどろいてみんなで學校の原つばへにげました。その時空を見るともう火は一ぱいであつた。その中にじむ所からげんまいのごはんのむすびをくばつてくれましたから私はそれを一ツもらつてやつと一ツたべた。

そをしてゐる中に日がくれてしまつた、又空を見ると、晝まよりずつと、まつかで

あつた。夜の十二時ごろになるとすこしねむつたからねむつてしまつた。その中に、こわいからあきて見ると、夜の十二時半じぶんであつた。そして私はやうやく三十分ぐらいいしかねむりませんでした。あとはこちらの方まで火事をもえてくるとこわいからねむりませんでした。その中に夜が明けましたから、家の方へいつてみれば家は、はんつぶれであつた、そして二日目からは學校のたいさうばへひなんしました。

地しんからのち

四谷區 鮫橋尋常小學校

第三學年女

櫻 井 正 子 (十歳)

あの大きな地しんがやんでから又大きな地しんがくるといけなひと言つて、お母様たちとうちの前の川にあつた船へのりました。するとすぐねえさんの家からごはんをたべにいらつしやいと言ひにきましたので、ねえさんがのつてゐる船へゆきました。そして、むすびをたべてゐますと、向ふがしへ火がついたと言ふので大さはぎでした。私はねえさんと、船からあがつてにげだしました。そして丸の内ですすんでゐると、

お母様たちとおあひすることが出来ました。お母様とはなんこのどうぞの前で、おちあうやくそくをしてにげたのでした。それから私やねえさんは高田のばばへゆきました。そのと中とまつてゐた電車の中で一ねむりしてまいりました。

大地震

牛込區 赤城尋常小學校

第三學年男

小田部胤明

九月一日午前十一時五十八分に大地震がゆれ始めました。さあたいへんと言つて庭に飛びました。方方の家のかはらが飛びます。その中に家のどぞうのかはらやかべが落ちて砂煙が立ち上ります。ゆれが少し弱くなつた頃山へにげました。山の上からはもう火事が見えます。それから近くの親類の渡部さんの庭が廣いのでそこへ行きました。間もなく二度めの地震がおそろしい地なりをしてゆれてきました。その中に渡部さんは方々からにげて来た人で門の所がいつぱいになりました。人々の話を聞くと下町は大火事がおこり人や馬が焼死んでゐるといふことです。おそろしい一日の夜はくれても空は火事でまつかにもえてゐます。いざと言ふ時はすぐに逃げられるやうに

して、二日庭で野じゆくしました。それから家に歸つて來ましたらごみでいつぱいでした。さうじをしてその夜から家にねました。こんなに人の死んだのも、こんなに大きな火事になつたのも皆大地震のためです。

ほんとうに九月一日の大地震はこはかつたと今でも思つてゐます。

この間の大地しん

牛込區 赤城尋常小學校

第三學年女

山野鶴江

九月一日はちやうど學校が初まる日でございました。私が學校からかへつて間もなく大地じんがゆり初めてだん／＼に大地しんとなりました。

それで家の中はたんすや色々のどうぐが落ちてたふれる、かべ土は落ちる、今にも家がたふれるかと思はれました。私や弟たちはお母さんにはへたすけ出されていちぢくの木へみつしりのかまのでゐました。

その中にお父さんがお役所からかけていらつしやいました。それでお父さんが「にははがけがくづれるとあぶない」と申しますので今度は外へ出て見るとおどろきました。

何はたふれるし、やねかはらは澤山落ちてゐました。その中に夜になりましたがでん氣もつきません。水どうも出ません。地震はまだやみません。

神田、あさくさ、日本橋、本じよの方では家がつぶれて大火じとなつてあります。私はこはくてくどうしたらよいかと思ひました。

お父さんもお母さんも持てるくらゐの荷物をげんくわんの所へ荷づくりをしておき大切な物を持つてきん所の人たちも皆大通りへのじゆくをしました。

牛込へは火が来なければよいがと心の中でしんばいしてゐました。

この大地しんと大火じで東京やぼうしうやよこはまの方は皆といつてもよいほどやけて澤山の學校も大きなお役所も商店もやけてなくなつてしまひました。

又悪くもない、何萬何千の澤山々々の人も死んでしまひました。ほんとうにかはいさうなことです。

にぎやかな東京もたちまちこげ土の東京となつてしまひました。私の學校はさいはい火が来ませんでよろしうございました。

學校も先生方もぶじで、やけ出された人々のために一しうけんめいにしんせつをつくしていらつしやいます。

何の神様がこゝりになりましたのか、ほんたうにこはいこととございました。

私たちもお父さんやお母さんにいただいたおこづかひを皆つかはずにためて、やけた人々のためにおくりたいと思ひます。

ねずみのおはなし

八月一日の大地震

牛込區 愛日尋常小學校

第三學年男

清水 顯

ぼくはねずみである今年は、ぼくの年で、三百六十六日だから、うんと、あばれてよいはずだ。

いのしし君は、じしんをつれてきて、東京見物をさしたからたまらない、いやだが、

もう出て行つてくれてまづ安心だ。ぼくは今年のお正月にはうんと、みかんを食べてやつた。三日の日にはねずみの國の花やしきへ行つたら、さるしばいもあつた毛かのもうもあやつり人形もあつた。みんなおもしろかつた、今年はずるぶるうれしい年だ。

九月一日の大地震

牛込區 愛日尋常小學校

第三學年女 大野菊代

九月一日にお店は休みでした、内では秀ちゃん芝居をやつてゐて、刀を抜ふとしたら、ぐら／＼動き出しました。

その時は十二時前でしたから、どこの内でも、おひるの、あかすをつくつてゐて、火をつかつてゐるさい申にあんな大きい地震でした。

私はをくで勉強してゐて姉さんは、病氣でねてゐました、しばいはえんたの上でしてゐましたからよかつたのです、しばいをしてゐた秀ちゃんは、おどろいてえんたの下へはつてしまいました。

うちのぼちやまでもあんなに小さくてやつぱり顔色をかへてなきだしてゐました、やうやく地震が終つたから外へ出てみると、四方が火事でした、私は火事のけむりを見てはごはんも何にもたべられせん。つゞいてぐら／＼くるちよつとしたじしんでも、「おさまれ〜」

と何度いつたかわかりません、あんまりおさまればかりいつていたので、ねむたくなりました。ねようと思へば。

『もし火事になつたら、さいちゃんを置いていつちやう』と言ふので、ねむらないでゐました。

二日になると裏から本や、ぼちをもつてきて電車の線路の石の上にブラックみたいな内を立てました。

夜は夜つゆにあたり晝はお天とう様にてらされ夜はちつともねむれせん、火事ではげてきた人は處々こげてされた着物でぐつたりした、赤ちゃんをおぶつたりこをりを横にしよつたりして、私の内へばかりもらいにきます、それだから着物やおむすびがだんだん少なくなるばかりでちよつとも多くはなりません。

うちのおとうさんはつぶれもしないで火事にもあわずしやわせだといつてゐます。

大 震 災

牛込區 早稻田尋常小學校

第三學年男 岡 野 茂

大正十二年九月一日は、私等の一生忘るゝ事の出来ないおそろしいかなしい日であります。

おひるの御飯がすんで、お母さんがテーブルをふいてゐますと、ぐら／＼とゆれて來ました、又何時もの小さい地震だらうと思つてゐましたら、ゆれ方がだん／＼はげしくなりました、お母さんと、兄さんと、弟と三人で、室のまん中へすわつて、お母さんにしつかりつかまつてゐるえてゐましたら、やうやく止みましたので、あゝこわかつたね。僕家がつぶれるかと思つたよ、と話してありますと、又ゆれてきました。今度は前よりも強く、外へにげださうと思つても餘りゆれるので、よろ／＼として歩かれませんか。ふすまがたふれるやら、せとものがこわれるやら、外では瓦の落ちる音や、人の泣

きさけぶ聲で、私等もこのまゝ死ぬるのかと思ひました。

やんだ時は皆の顔は青ざめて居りました。あぶなくて家へ入られないので外へござをしいて皆んなとひなんをしてをりました。

どこの屋根を見ても、皆瓦がふるい落されてゐます。

お父さんを心配してゐましたら二時頃ぶじでおかへりになりましたので安心しました。

其晩は東京一面火の海になつてたくさんの人が死にました、私共も三日三晩は外でねましたが、家もたほれず、誰もけがをしませんでした。あの時はほんとにおそろしい思をしました。

大 地 震

牛込區 早稻田尋常小學校

第三學年女 廣 江 富 子

思ひ出しても、おそろしいあの大地震の時、私はねえさんと二人で御飯をたべてゐました。

みち／＼がら／＼

と物の落ちる音、人のさけぶ聲におどろかされて、ふるへ乍らたんすにつかまつておました。おかあさんと弟は、朝から日本橋へいらつしやつて留守でした。

大きな聲で泣いて居ますると、向ふの方から、火事だといふ聲がしてきました。たんすにしつかりつかまつてゐると、お父さんが歸つていらつしやつて、けいさつのうらが広いからと言つて連れて行つて下さいました。

お父さんの持つてきて下さつたお菓子を食べても少しもおいしくありませんでした。

はやくお母さんたちがかえつて、いらつしやればいいと思つてゐると弟がどろまみれになつてかへつてきました。

ねる時になつても、まつかにもえる、火を見ては、とてもねむれませんでした。弟は、こわい／＼といつておたのにいつのまにかねてしまひました。

ねえさんや、お母さんは、いつしうけんめいに、荷物を作つてゐらつしやいました。今でも時々餘震があります、いつになつたらこのおそろしい地震が止むでせう。

死人

牛込區 余丁町尋常小學校

第三學年男

櫻井守

十二月三十日の午後二時頃でした。僕があとなりのしげ子さんとまりなげをしてあそんでゐるとどこかかのおばさんが來て僕達に「あのおをやまぼちへ行つてごらん親子三人くびをしめて死んでゐたから」

と言つたので僕達は大きい子の後をついてあをやまぼちへ來ました。そして左へまがつて右へまがりさかをおりて又さかを上りました。少し行くと子供達がたくさん集つて見て居ました。一間半位のひの木に若い學生と若い女の人とあかんぼが一人死んでゐました。あかんぼは黒いメリンスみたいな様なかけぶとんがかぶせてあるので見えませんでした。そして學生と女の人はあたまに黒いひもでゆはへて木にぶらさがりながらだきあつて死んでおました。僕はきびが悪いやらびつくりするやらでどきつとしました。そして少しにげて來ました。僕はきびが悪いので歸つて來ました。しげちゃんはんはも一度見て來ようと言つて又見に行きました。僕は今度は母さんとあとなりの

おばさんとゑい子さんと又見に行きました。母さんはこはいのかとほくで昇をおぶつて見ておました。そしてじゆんさがその死んだ人の名をしらべておました。前来た時はじゆんさは四人でしたが、今では一人しかおませんでした。僕は見てから歸りました。三十日の夜はそれが思ひ出されてきびが悪くてねられませんでした。朝起きて新聞を見たら、日日新聞の一等上に書いてありました。僕はよんで見たらその人はくびにへこをびをまきつけて死んだそうです。どうりできのふおとなりのお妙さんがあごにひもがついてゐるといつたなと思ひました。それから暗い所を歩くとそればかり思ひ出されてもういやになつてしまひました。

九月一日の大地しん

牛込區 余丁町尋常小學校

第三學年女

林 雪子

私は一日の朝いつもよりも早く起きて學校へ行きました。學校では皆海へ行つて黒くなつたことなどを元氣よくはなして居ました。それからおしきをすませて家へ歸つて来てごはんをいたゞいて居ますと急にがた／＼とゆれ出

しました。はじめの中は少ししかゆれなかつたので私はやせがまんをして笑つて居ました。その中にだん／＼大きくなつて来て、テーブルの上のつて居た物はたふれる、たなの物はがら／＼落ちて来て、なんとも言へないあり様となりました。私ははだしのまゝにはへ出しました。ついこの間ゐなから来た女中などは「おつかない／＼」と言つてさはいで居ました。やがて地しんがやんでから裏のき戸を明けて外へ出しました。すると又大きなゆりかへしが来て向ふにある石かきがつづれてしまひました。それからつづいてその日はいく度となく小さい地しんがありました。すると向ふの空がうす赤くなつて黒い煙がぼ／＼上りました。そこへあつまつた人々は火事だ／＼と言出しました。火事是一所ではなくてあつちにもこつちにも煙が上りました。

私はどうなることかとなくにもなけませんでした。やがて夕方になつて、お母さんたちは内へおかへりになりましたが、私たちはまだこはいなのでござの上へすはつておました。その日はごはんもいたゞけないうでまだゆれてゐるやうな氣持で居ました。火事はだ

ん／＼暗くなるにつれて空を赤くして居ります。さすれば、暗くもその日はのじくをしないでねました。

私はこはかつたあの日のことを考へるとゆめとしか思はれませぬ。

大震災の日

牛込區 津久戸尋常小學校

第三學年男

萩原健一

あゝ忘れられない大正十二年九月一日、この日は朝からふつてゐた雨もすつかりやんで、むし暑い日であつた。學校のしぎやうしきから歸つて僕は兄といふびんきよくへいつた。まだ口でまつてゐるとがた／＼みち／＼電燈は左右にゆれる、かはらは落ちる、かべはぐずれるともたつてはゐられないから急いで兄に手を引かれてとびだし石の上へすはつた。その内やんだので一もくさんにかげ歸つた。家の中を見ると材木がたふれてゐるので川岸のやなぎの下にゐると家から皆出て來たあたりの人も表に出で大きな聲でてんでに名をよび合つてゐる。人々の顔色はやなぎの葉のやうにあをかつた。ゆかたのまつかになつた人、頭や足から血の流れた人、はだしの人、おまは

りさんの白ふくはほこりにそまつて赤土色によごれてゐる。その間もゆさ／＼ゆれる。僕の町でもたふれた家から黒煙が立つてゐる。向ふの方にも煙が見える。あつ、かじだ。交番のおまはりさんは家へとびこんで電話をたゝいてゐる。出ない出ないとさけんでゐる。あゝ夢ではないかこれはほんとか。今に僕等のゐる所はどんなになるだらう。ゆれる度に地面にひびがつくおそろしさにもふるふる子供は泣く黒煙はさかんに立ちのぼる。僕の家にも火がささうだ。その時父が「神樂坂の方には煙が見えないから柴田さんにいきなさい」といつた。田中さんにつれられて僕ら四人の兄弟はひなんしたのである。今ごろ家はどんなであらう。おしんのこはさもわすれて家のことが氣にならだした。おばさんにおにぎりやちやをいただいて食べた。その内秋山さんがとんできて今家はやけたとしらせに來た。それは日もくれかゝつた夕方であつた。

復興

牛込區 津久戸尋常小學校

第三學年女

手塚千枝子

九月一日の大しんさいで、焼野原となつた東京も、今は復興しました。私の家は須

田町にあります。うちも復興してお客様もおひくいらつしやいます。この間の十五日に引き越して来たので、學校へ毎日いんせんでかよつてゐます。焼野原であつた東京が復興したのはうれしいことです。お父さんは、

「もう十年もたてばしんさい前のやうな東京になるだらう」とおつしやいます。私もお父さんがおつしやつたやうに、私が二十歳ばかりになる頃は、もとの東京よりもりつぱになるだらうと思ひます。

おばさんの家のポチ

牛込區 江戸川尋常小學校

第三學年男

大山 該三

ポチは伯母さんの家に居た犬のなである。大へん僕らになつてゐた。いつでも僕らは伯母さんの家へ行く。歸る時になると大ていポチは僕らを見送つてくれる、いつかもおばさんの家へ行く

と歸る時ポチが見送つてくれた、そしてとうとう家まで来てその晩は家でねてしまつた。

明日歸へつた。又或時は伯母さんの家へ行つてポチへのつてポチの足をびつこにさせてしまつた事もある。

今はもう伯母さんは朝鮮へ行つて居る。

ポチは今頃どうしてゐるだらう。

ぼうしについたぼんくさん

牛込區 江戸川尋常小學校

第三學年女

大鳥 居純子

私のぼうしのかざりにぼんぼんさんが二つさがつてゐます。

私はきのふおねぼうをしましたので、いそいで學校へ行かうとするとぼんぼんがごとりとあたまをぶちます、いたくていたくてかけだそうとしてもかけだされません、私はおこつてひつぱりますとぼんくがとれました、私はびつくりしてそこらを

さがしました。がそこらにはころがつて居りません。私はびくびくして家にかへつてからぼつつけつとを見ますとちやんと入つて居りました。私はその時あかしくてくつてたまらなくなりました。今日はしかたがないから古いぼろしをかぶつて來ました。

大地震

牛込區 市ヶ谷尋常小學校

第三學年男

濱崎

齊

大正十二年の九月一日の、おひるごはんを、食べようとしてはしをもつと、第一の地震がぐら／＼と來たので、はだして外へ飛び出さうとすると、お母さんがけがをするから下駄をはきなさいといつたので、又家に入つて下駄をはいて外へでた、さうするとお寺のおばさんが、皆さんこちらへいらつしやいと呼んだので、急いでお寺の庭へでようとする、又第二のぢしんが來て表の國民銀行がつぶれると、まもなく士官學校が火事になつたけれ共兵隊さんがけしとめました。さうするとみんなの心がやつと安心したかと思ふと、こんどは東の方の空に入道雲のやうなけむりがどん／＼もへ上りました。

こんどはお父さまの御かへりがおそいので心配していると、五時頃おかへりになつたので僕もお母さんも兄さんもやつと安心しました。

大地しん

牛込區 市ヶ谷尋常小學校

第三學年女

江口篤美

九月一日は、大地しんでした、うちではお父さまはお役所にいつていらつしやいました、お母さまはふかがはのふどう様へおまわりにいらつしやつたのです、私とおねえ様と弟と三人であるすゐをしてゐました。ごはんをたべようとしたら地しんがきたので、お姉様は弟をだいてたんすのそばへいきました、私は机にかぢりついてゐました。地しんがやんでからおにはへ皆で松の木にかぢりついてゐました、弟はお母様がゐないとなきだしましたので、私はずいぶんこまつてしまひました。

火事がすごいやうにもへたつて來ました、お父様やお母様はどうなさつたらうと思つて心配でたまらなくなりました、お父さまは三時ごろかへつてゐらつしやいました。お母様は五時頃かへつてゐらつしやいました、私はお父様もお母様もぶじにかへつて

いらつしやつたのでずいぶんうれしうございました。

九月一日の夜

牛込區 牛込尋常小學校

第三學年男 板倉正三四

だん／＼空は赤くそまつてきました。あゝおそろしい火事がといふところへ、又地震が一ゆり、おどろいてゐると又〇〇人がくるといふおどろいてゐるところへ、又おどろかすから僕はこわくてしやうがない人のいふのをきいてゐると、〇〇じんが井戸へ毒を入れるからといつていどにばん人がゐます、うちのお父さんはぼくたちをまもつてばんをしてゐます。

火事はだんだんともへひろがつてきます、お母さんはぼくたちにふとんをしいて下さいましたが、こわくてねられませんが、一ばん中もへました、やがておそろしい、夜があけて朝になりました、まだもへてゐます、あゝおそろしい夜であつた。

朝道を歩きながら

牛込區 牛込尋常小學校

第三學年女 米村幸子

私はこの間、朝道を歩きながら思ひました、この寒いのに着物も焼けてしまつた焼出されの方はづい分おこまりだろう、バラックの寒い家に入つていらつしやるのに、私たちは、こうして毎日學校へ通つてゐるのはほんとうにしあはせです。今焼けだされの方は何をして、いらつしやるだろうと、思ふとほんとうに、かわいさうになつてしまひます。

早く暖い春が来てお花見にでもいけるやうなじこらになるといいと思つて道を歩きながら學校へ行きました。

地

震

牛込區 山吹尋常小學校

第三學年男 花井俊士

九月一日は學校の始業式でした。式がすんでから友達と家へかへりました、少し遊んでから皆でごはんをたべようと思いましたら、めり／＼と大地震がきました、僕はお母さんやお兄さんや弟と外へ出ようと思いました、なか／＼あるけません、やつと電車通りへ出て行つて見ると、そこへお姉さんも出てきました、又大きなのがつゞいてゆりました、三時ごろお父さんがかへつてきましたので、やつと安心しました、晩になつて天幕をほりました、そらは一面に赤くうつりました、あとでさけばほう／＼が火事であつたからでした、僕たちは三日三晩電車通りへねました、雨がふりだしましたから、家へかへりましたが、度々地震がゆるるので夜もろく／＼ねむれないのでした。

大地震のあと

牛込區 山吹尋常小學校

第三學年女 高木 キク子

大地震のあと、家の前の通を、やけだされた人がたくさん通りました、みんなあはれな人ばかりでした。

私は二日のおひるごろ、ずいぶんかはいそいな人を見ました、それは女の人が三つ

ぐらひの男の子をおぶつて、五つぐらひの女の子の手をひいてゐました、女の子は何を思たか、ふとたちどまつていひました『かあちゃんお家へかへろうよう』その子のおかあさんが『ぼうやのお家はやけちやつたのだよ』と目になみだをためて言ひました。僕はそれをきいてゐると、ひとりでにかなしくなつてその人たちが見えなくなるまで見てゐました。

梅

東京市武蔵野区一日の大地震 牛込區 長延尋常小學校

第三學年男 小橋 實 清

梅は冬中かかれたようにみえますが中ではたらいてゐるのです。それから梅の木の上にわたのような白い雪を一寸か二寸ぐらひのつけたときは、づいぶんつべたからう、だけど梅はづいぶんがまんづよい。ぼくたちは雪をいじくるとつべたいが、梅はつべたくはない。梅は春になると花をさく。梅は春をまつてゐるのだらう。それから八幡様の梅の木は赤いのが三四本あつて白が五六本ある。それから天神様は梅の木がおす

きだといふことをききました。ぼくは梅の木がすきだ。はやく花をさいてくれればよいとおもふ。

東京

牛込區 長延尋常小學校

第三學年女

山本節子

東京は九月一日の大地しんでこんなになりました。にぎやかな銀座、神田、浅草など、地しん後の火事でみんなやけてしまひました。それからバラックがたつてやけ出された人はバラックに入つてゐます。その有様といつたらありません。バラックはあたりまへの家とちがつてかべもないし、とたんでかこつてあるやうなものですからこの寒さにも、づい分ひどいでせう、私たちの牛込區は無事でしたからちやんとした家に入つてゐる事が出来ます。ほんとうにしあはせです。学校の先生方も皆さんも、バラックに入つてゐる方はどんなにかお寒いこととせう。私の近所では銀行がつぶれました。今は又れんぐわで造り直してゐます。早く早くもとの東京になればよいと思つてゐます。

しんばいをしたこと

小石川區 礪川尋常小學校

第三學年男

和田義信

(九
五ヶ月)

ぼくは、ごはんをたべてしまつた。そしてあんかにあたつて本をよんでゐた。その時お母さんがおはを食べてゐた。急にお母さんがえんがはにいつて、せきをしだした。ぼくはどうしたのかと思つて、いつてみたらおどろいた。お母さんがせきをした所にちがあつた。ぼくはお母さんにこのちはどうしたのときいたらお母さんが、ちをはいたと言つた。そうしてしばらくたつてのどがつまりさうだと言ふのでまたをどろいた。ぼくは石橋さんにいつたらい、でせうと言つた。そしたらお母さんもいこうと言つたのでぼくもついでいつた。そしてむこうについてしばらくしたらお母さんがおそくなるといけなからと言つたからしんばいしながら學校にいつた。あとできいたらなんでもないと言つたからあんしんした。

私のお人形

小石川區 礪川尋常小學校

第三學年女

上村重子

(九
六)年

私はこの間、よそのおば様におみやげをいたさしましたので、いそいであけて見ると、大きなお人形で、それはくかはいらしいお目で、私のお顔を見つめてなんだか笑つてゐるやうでした。それで、私は大そうかはいくなつて、そのお人形をだいたりおんぶしたりしてやりました。その時、お人形の着物の下から、一枚の紙きれがおちてきました。それをひらいて見ますと、それはくくりつばな、はくらの切ぬくお人形でした。私はうれしくてそれを切つて遊んでゐると、急にはさみがきれなくなつたので、おどろいてよく見ますと、紙を二枚にしてゐたので、自分ながらをかしくなつて、くすくすと笑つてしまひました。

そばのお人形も、私の顔をのぞいて笑つてゐるやうに見えました。

大震火災

小石川區 明化尋常小學校

第三學年男

安藤

蕃

(九
八)年

ぼくは暑中休暇中岩井といふ海に海水浴に行つて、八月廿五日に歸つて來ました。九月一日には餘り暑いのもつと岩井に居ればよかつたと姉さんや兄さんと話してゐた。少したつとゴウゴウとへんな音がしてそれがやむかやまない中にがたがたと家がゆれ始めました。ぼくは母さんのゐる所へ飛んで行き一所に皆かたまつてゐた。そうすると外の方で「中にゐてはあぶないから外へお出なさい。」と言ふ聲が聞えたから外へ飛出した。松の木の根へつかまつてゐた。その時分は火事といふことに氣がつかなかつた。時間はだんだんたつてゆくそれに連れて火事といふ事がこわくなつてきた。地震の事はもうわすれてしまつて火事の方が心配になつてきて、もしやこつちの方が焼けるのじやないかしら、それもあたりました。そんな事を思つてゐる中にだんだん暗くなつてきた。母さんは病氣だから人力車にのせて車夫がゐないから兄さんと書生が引いて先へ上野へおくつてしまひました。精養軒をかりてはいつたと兄さんがいつ

た姉さんとおばあさんとぼくと女中と一しよににげた時はもうまつくらだつた。精養軒まで一里もあるかと思つたくらいで中々あるけなかつた。上野の山へ上る時石だんの方へまわれないのでこうかせんの工事をしてゐる切立てた赤土の山の所へ来た。そしてたらしめてくれたつなにかまつてよじのぼつた。そこから四方見わたすとからだかぞつとした。どこを見てもまつかで一方だけ少し火が見えない。それから母さんの所についた。そこで一夜を明してよく日の晝ごろ山に火がつくといふので今度は大場のおばあさんの所までにげた。おばあさんの家は小石川林町だから火はないだらうとさいて又歩きだして夕方やうやくおばあさんの家へついた。今考へてもおそろしいくらいです。

私の決心

小石川區 明化尋常小學校
第三學年女 森岡富美子 (九ヶ月)

私のお友達はおそろしい九月一日の大地震と大火事ですつかり貧乏になりました。けれどもお父様は學校の先生でしたので思つたほどにもこまらず、毎日學校へか

よつて前よりも一そうせい出して勉強しましたので、第一學期には二つ三つ乙などもあつたのが今度第二學期には全甲になつて先生に大そうほめられました。私はそれを見て、ずぬ分はづかしく思ひました。やけもしないで、幸福にくらしてゐる私が反つて乙がたくさんあるのです。

いつか先生がお修身の時に人は心がけ一つでどうにもなるとおつしやつたことがありましたが、私ははじめてあゝほんとうだとかんがへました。これからは一生けんめいに勉強してそしてりつばな人になつて早くもとのやうなりつばな東京にしたいと思つて居ります。

大地しん

小石川區 黒田尋常小學校
第三學年男 高木英夫 (八ヶ月)

九月二日の大地しんはずいぶん大きかつた。僕が學校からかへつて来て本を讀んでゐると、へんなうなりがして「もぐもぐ」がた」とゆれ出した。僕はびつくりして、そばに居たおとうさんに、かぢりついた。

地しんはます／＼はげしくなつて來たので、夢中で外へとび出してしまつた。するとうちの中から「あぶない／＼」と言ふ聲がしたので、又うちの中に入つた。地しんがすこしやんだ、この間に八幡山へにげようと言ふので、山を上り始めた。急に向ふ方で大きな音がしたのでどきつとした。いそいでかけ上つて見ると、八幡様の拜殿がつぶれた所で、ほこりが方々へちつて、木や家々の屋根はまづ白になつてゐた。八幡山へ二時間ばかりひなんして居た。するといつの間にか方々から集つて來た人で、山は一ぱいになつてしまつた。間もなく火事が方々に起つた。それが皆一所になつてしまつたので、一面火の海となつた。だん／＼こつちの方へもえて來る。その内に吉原堤の方に「ごう／＼」と音を立て、火をまき上げながら、もえて居る物すごい所が目についた。おとうさんが「つむじ風だ、早くにげる」と言つた。その内に風がすこしやんだので、荷物をまとめてしんるゐの人たちと一所に、上野の山へにげた。上野にいついた時にはもう日はぐれて居た。坂を上らうと思つて上り始めたが、人ごみの中におとうさんがじてん車を持つて居たので上れなかつた。おかあさんがそれを見て「英夫おいで」と僕の手を取つてくれた。やつとおとうさんが目つかつたので「向ふの山へにげよう」と又三人で歩き出した。そして停車場を通つて、うぐいす谷の方から兩大師の

脇に行つて、夜を明した。朝になつてから、山を出て動坂を通つて、知人の家へよつた。その時ごちさうになつたおむすびのうまかつた事、今でもわすれられない。それから大塚を通つて小石川の家に來て見たら、家が大へんまがつてゐたのでおどろいた。それから近くの久世山へ二三日野宿して、荷車にのつて田舎へ行つた。「この前の大地しんから丁度七十年目だ」とおとうさんは、指を折つて數へながら言つた。

東京ふくこう

小石川區 黒田尋常小學校

第三學年女

黒川 正子

(十ヶ月)

じしんでつぶれたり

やけたりしたけれど

だいぶばらつくができました

みんなで一つしよにはたらいで

もつと／＼いゝ東京にいたしませう

ぢしんがあつても、くわじがあつても

秋の一日

小石川區 小日向臺町尋常小學校
第三學年男 佐野省三 (九月七ヶ月)

十八日の朝誰も起きないうちに一人で飛起きた。寒いのにひやひやした着物をきた。つめたいつめたい水にはかなわない。顔が赤い。顔を洗うと女中がゆを持つて来てくれた。けれど私は學校で「ゆらぎ」とゆふことをならつた、とゆふことを思つて、そのおゆは弟の方へつかわして下さい!! とことはつてしまつた。がまんをしてつめたい水で顔をあらひ、ごはんを食べて學校へ行くと中ちやうど雨が降つてゐたので、歩くのにしまつが悪かつた。

運悪く學校の方から自動車が二だい來た。よけたけれども二だいの自動車にはねを上られて、ほんとにすいつてしまつた。

仕方なしに學校に行つておとさうとしたが、はねはまだかはかなかつたので、すこしもあちなかつた。そのうちにかねがなる、いそいで教場にはいつて先生のあいでもまつてゐた。間もなく先生がいらつしやつて、じぎやうがはしまつた。

算術をした。私は一つもまちがはず、あちやのこさいさい、大そううれしかつた。その次は讀方、その次は書方、自動車には運が悪かつたが、べんきやうには大そう運がよかつた。こんな日はあんまりなからうと思つたが、それは運だから私にはわからない。

歸るかねがなつた。したくをし、みんな歸つてしまつた。いつものとほりおかしをいたゞいた。おいしい事おいしい事、その味はどをしてもわすれられない。その後で勉強をした。

をはると、僕の大すきな竹馬にのつて遊んだ。昨日の日記にも竹馬のことをつけた。だん／＼夕方になつた。夕飯をたべていつものものどほり、早くねてしまつた。私の一日はたのしくくれました。

やけいの夜

小石川區 小日向臺町尋常小學校
第三學年女 中村千尋 (八月十一ヶ月)

〇〇人さわぎで、皆がさわいでゐた頃、私の住んでゐる町内の人が、暗くなつてか

ら町内中を三人で見廻るのです。私の家の父様もやけいに出ました。一人が金ぼろを
チャランチャランとつき、一人はてうちんを持ち、一人は方々を歩くばつて、一時間
こうたいで歩いて居るのです。父様は歩きつけないからすぐのどがかはくので、家へ
牛乳を飲みに歸つていらつしやいます。軍人上りの自動車屋の主人はシャツとズボン
下をはいて、長年しまつておいたから多分中みはさびて居るでせうが、サアベルを下
げた物々しいでたちをしてやつて歩ました。夜中になると、やけいのつめしよで、
さつまいもをふかしたのと、煙の出たほかほかのおむすびとを出しました。父様は初
めなんだかきみが恐くて食べずに居ましたが、お腹はすくし皆がおいしさうに食べ出
したので、もうたまらなくなつて、さつまいものふかしたのと、おむすびの出来立てと
を食べましたら、思つたよりうまかつたとおつしやいました。

えん日

小石川區 金富尋常小學校

第三學年男

小田

暁

(九)年
(五)月

けふはえん日... 小石川區 金富尋常小學校 第三學年男 小田 暁 (九)年 (五)月

店づらり

ほうずき、あめや

ふる本屋

やまぶきでつぼう

かきもちや

それから、うゑき屋

ふせん屋

風がそよ〜

風鈴や

いやな晩

小石川區 金富尋常小學校

第三學年女

奥村三根子

(九)年
(七)月

かぜがこと〜
戸をたたく〜

小石川區

第三

二二七

あかちやん

小石川區 金富尋常小學校

第三學年女

阿辻 トミ子

(九年十月)

「うちのあかちやんは今二つです。あたまの毛がボウ／＼と立つてゐます。「かをるちやん」と私がよぶとグル／＼と見まわして、しまひには見つけません。ごきげんのいゝ時にはきやら／＼と云つて笑ひます。私はその笑ひがほを見るとかはいく／＼たまりません。

そのかわりごきげんのわるい時はちつとしてゐるとなしてしまひます。このごろはなんでも口の中に入れるので、そばについてゐないとみんなたべてしまひます。

きのふのばんおとなしかつたので、ふすまのそばへねかしておくと、おき上つてふすまを二寸五分ほどやぶつてその紙をたべようとしたので、私が取つてしまひました。こんなふうにしたづらをしますのでこまつてしまひます。うちに赤いネルでこしらへた犬がゐます。「わん／＼やあいであいで」と言ひますと、

犬のゐる方を見ます。まだ物はいへません今は着物をたくさんきてゐますから、はへませんけれど、おねまきをきてゐる時は二歩三歩はいます。おねまきをきてゐる時はいつもよりなんだかかはいく／＼になります。ばんは早くねる時もあります、たいてはおそくねます。そうして朝は早くから、目をさますので、お母さんはこまつてゐます。

九月一日

小石川區 御殿町尋常小學校

第三學年男

四方田 善雄

大正十二年九月一日の大震災にはおどろきました。初の地震がすんでお寺へにげましたら人が何十人となくゐました。私は頭がぼんとしてしまつて御飯が少しか食なかつた。その時おとうさんはおつかいにいつて居たのですから心配でたまりませんでした。私は久堅町の方までもえてくるかと思ひました、私はもうそれで死ぬかと思つた、あの大火事の時東の方は煙と火、西の方は入道雲見たいな煙がどんどん上つて行きました。あの地震の時二日目に私の母のしるゐが浅草にあつたもんだから、私の家へにげて來ました。みんなわかれ／＼にげてきました、一番早くきたのは見さんでした。

二番目がをばさん、三番目はきないので見つけました。先に見つかったのは男の子でした。そのつぎには春ちやんといふ女の子が見つかりました。それから家の近所で七八人〇〇人がつかまつたので大さわぎでした。

九月一日

小石川區 御殿町尋常小學校

第三學年女 増山八重子

九月一日の大地震じつにおそろしかつた。

私はおとなりのにかいであそんでゐた、そしてころげおちるやうに下へ下りた、そとへ出て見るとやねのかわらは一まいもない、うちへはいればびんのこわれががまますへ七俵もでてゐる、私のうちでは山のとちうにのじゆくをした、夜中に目がさめて見ると上野の兄さんがゐた、お母さんは上野があぶないから歸つて行きなさいといつた、火がまつかに見えるので馬力で荷物を板橋へ出した。

死んだ人

小石川區 青柳尋常小學校

第三學年男 鬼頭四郎 (九月八ヶ月)

こんどの大地しんと大火事のために何萬人といふ人が死にました。僕は死んだ人の繪葉書を見ましたが、それを見ただけでも氣持が悪くなりました。

この間の日曜に僕はおぢさんと焼あとを見に行きました。まづひふくしやうに行つて見ますと、死んだ人を焼いたほねが砂のやうになつてゐて、そこゝに山に積んでありました。

又そのみぞには人のあぶらが天ぶらのあぶらのやうに浮んでゐました。次に吉原へ行きました。すると池のそばに小さな小屋が建てあつて、おせんかうをたいてみんながそこで拜んでゐました。

それから方々を見て歸へりましたが、たくさんの方々の死んだのはほんとにかわいさうだと思ひました。

いやな日

小石川區 青柳尋常小學校 第三學年男 西 森 良 喜 (九月 六ヶ月)

九月一日。僕がちようど晝ごはんを食べてゐましたら、何んだかごとくといふへんな音がしました。お母さんは「地震だ。」と言ひながらすぐ四でふ半の方へ行きました。すると方々の屋根からがら／＼とかはらがおちます。柱がぎい／＼と音をたてます。かべにはひびがあるし、たんすの上からはいろんな物がおちるし、何んだか氣みが悪くなりました。それから少しやんだ時急いでげたをはいて外へ飛び出し、細川さんのおやしきにげこみました。細川さんではみんなを門の中へ入れました。どこから来るのか後から／＼とたくさんの人が来て、たちまち何百人といふ程になりました。夜になつても電とうがつかないのでちようちんをつけてくれました。みんなはわい／＼言つてゐましたが、僕は晝のつかれでいつかぐすりねてしまひました。その翌日も細川さんのおにはで野じゆくをしました。その又翌日は雨が降つてき

九月一日

ましたので仕方なく内ねることにしました。しかし何んだかこわくてよくねつかれませんでした。出この頃になつてやつと氣も少しおちつてきたので毎日元氣よく遊んでゐます。火もち地しんはこり／＼です。小石川區 指ヶ谷尋常小學校 第三學年男 鳥 田 英 二

「金盛さん、金盛さん」と呼ぶ聲におどろいてふり向くと、それは諸橋さんでした。まよふ間に、門をくゞりながらも雲のすがたが、目の先から消えませんでした。

冬の夜

小石川區 大塚尋常小學校

第三學年男

加藤勝美 (九年六月)

一夜もだん／＼ふけて寒くなつて來た。冬の晩はどこともなくしんとしてそこにはいつものおでん屋や夜みせがでる。なつとうやも毎晩出るが外はずいぶん寒さだらう。時々下駄の音がこぼるやうにきこへる。僕はお家の者と一つしよにざつしを讀んでゐた。竹馬にのつて一寸表へでて見た。北風にほをつぺたをえぐりとられるやうなので家へはへつた。

電車も通るのが少くなつた。いつものなつとうやが來た。年頃は僕位だ。おかあさんは『かあいさうだね——一本おくれ』といつて買つた。

私の學校

小石川區 大塚尋常小學校

第三學年女

鷹田登美枝 (九年十一月)

私の學校は、大塚小學校と申しまして小石川區大塚仲町四十一番地にあります。もとだてさまのおやしきだつたさうで、大正十年に出來たのでちやうど私が一年生にあがる時です。

學校の門をはいると、向つて右がはにうてん體操ば、左がはにはうんどうばがあります。

毎日大勢の子供がげんきよく體操したり、おもしろくあそんだりします。

又りつばなしやうかしのつも、りかしのつもあつて時々しやうか會やてんらんくわいも

あります。先生も三十九人もおいでになつて、まことによくおしへて下さいますので、私たちは學校へゆくのがなによりのためです。又なつやすみにはなつの學校があつて、先生方からいろ／＼のためになるおはなし

をきいてあついなつをすごすのです。秋には大うんどくわいもあります。くわだんもあつて、きれいなみどり色のしんめをふきだしてゐます。

私たちがみんな、花に水をかけてやつたり草をむしつてやつたり、又石などがあるとどけてやりますので、花もよろこんで、この春はきつと私たちにきれいなかほを見せてくれるでせうと思つてをります。

それで先生方も私たちを、ほめて下さいます。

九月一日

小石川區 駕籠町尋常小學校

第三學年男 高橋貞之七 (十歳)

私共のどうしてもわすれることのできないおそろしい日であります。私は友だちとたのしく外であそんで居りました。そうするとおしんだおしんだといふうちにどうすることもできなかつた。家がつぶれる、かわらがとぶ、つちけむりがたつてまつくらになりました。少ししづまつてから家へきてみると大さわぎをしてゐました。それで

もだれもけがはありませんでした。そのうちに本ごうの方に火事をはじめつて一面の火となりました。夜になると電とうがつかないので外は一そらものすごくになりました。ろうそく一本で夜の明のを早く早くとましました。火事はまだどんどんもえてゐました。いつになつたらさえるのだらうといつて皆なしんばいさうに、にもつをこしらへてかほを見合せてゐました。よしんはしきりなくきます。やけどされた人々はおなかのはうへでんととにげました。三日三晩やけとうして東京の大半はやけの原になつてしまひました。しあわせにも私の家はたすかりました。家がつぶされた人や、やけどされた人にはどんなにきのだくだかわかりません。

わすれられぬ日

小石川區 駕籠町尋常小學校

第三學年女 小山美代 (九歳 八ヶ月)

小さい地しんが来る度にあのおそろしかつたかなしかつた地しんを思ひます。あのにゆうどう雲、赤い空、てぬぐひかぶり大きな荷物をしよつて行つた人、どこへ行くともなしに。

小石川區

小川さんに聞けば上野の池のそばで、赤ちゃん生まれたばかりの母さんに、八つばかりの男の子が、はすの實を取つて来てあげてゐたと。ひふくしやうの火の中を通つて來られたお友達も。岩さきの原で野じゆくした私たち。
 あゝあの時が次から次へと思ひ出される。
 先生から聞けば、バラツクの學校はみかんばこのお机でおなべのお火ばちだと。それらを思ふと私たちはほんとうにしあはせだつた。
 このやけた東京をりつばにするのは誰だらう。

大震災

小石川區 林町尋常小學校

第三學年男

眞板謙藏 (十二歳)

大正十二年九月一日時間は午前十一時五十八分ごろ、人間のいやがる大地震がやつて來た。

がた／＼と大きな地を動かして、この大日本帝國で一番大切な大東京の家をしやうぎだほしのやうにばた／＼つぶしてしまひ、その上大火災をおこして大東京をぜんた

いはひにしてしまふかと思ふほどすごくもえた。ふなへるうごき／＼の大地震があらまそのけむりといつたらば、ちやうどふんくわのけむりのやうにいろ／＼のこはい形が動いてゐました。

二日目からは〇〇人さわぎでした。
 三日目は上野の山にひなんをしてゐた、人たちの家が火事ではげて行く人は皆な青い顔をしてゐました。道路を見ると人の名をよんだりする人もまた子供の泣き聲やらでいろ／＼のさわぎをしてにげて來ました。

私は前のあき地に野ぢくしてゐました。
 私は父母のそばについてらくらくしてゐます。
 大震災にあつて父母にはなれてかなしくくらししてゐる子供もありません。ほんとうにかわいそうです。
 私は毎日學校に行き近所の子供と遊んでゐます。
 又復興の心を皆んな持たなければなりません。

忘れられない日

小石川區 林町尋常小學校

第三學年女

丸山 郁子 (十一歳)

大正十二年九月一日ちやうどその時私は學校からかへつてすぐでした。

まだごはんもいたゞきませんでした。十二時ごろがたゞとたいへんな地震がまゐりました。

あかあさんとよつちやんと私と三人でたんすのそばへ小さくなつてゐましたがあきあがることもできませんでした。

しばらくたつて小やみになつてから三人で門の外にでました。はじめてほうぼうの瓦や石がきなどがこはれてゐるのにきがつきました。

それから時々大きな地震がまゐりまして、家にはいることが出きませんでした。またおとうさんはどうなされたかと三人でしんばいしてゐましたが三時頃ぶじにかへりになつてみなぶじなのでよろこびました。

それから二晩ほど外にやすみました。いまかんがへるとおそろしい大地震でありま

した。

思ひ出

本郷區 湯島尋常小學校

第三學年男

與曾井 肇 (十歳)

九月一日は思ひ出すあの大地震の日です。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分と聞くと「あの時よく逃げられたね。」と言ひながら涙を出す。僕はあの時友達と蟲取をして遊んで居た、とたんがら〜と大地震、僕は隣のかはらが落ちた、め足に一つきづが出来た。

その時方々で「地震々々」といふのが聞えた。そして皆むしろをしきその上でふるへて居た。

その時はるか向ふから、黒い煙がもう〜と上つて来る「あそこから火が出た」と誰か言ふと煙はますます〜上る。その中に煙は四方に起つてひなん者をつ、これはいけない、女子供は上野へ行け〜。」と言ふので上野へ、おされ〜向つた。赤んぼのくびは取れる如く走つた。

火はどん／＼ついて来る、又々こゝもあぶないといふので、岩崎ていのはににげた。

そこでひなんして居る中に火はきへて来た。

僕の家は丸やけとなつた、だがそれもゆめのやう、今は到る所ブラックが建つた。

明るい氣持のよいりつばなみやことなるのも、このいきおひではすぐであらう、僕等も大いにべんきやうしやう。

思ひ出

大正十二年八月一日午前十一時五十八分、本郷區 湯島尋常小學校 第三學年女 猪股きみ子 (十歳)

あゝ思ひ出してもぞつとするのは去年九月一日の出来事であつた。

私はその時二階でえんびつをけづつてゐました、さうすると第一回目の大地震が来ました。私はびつ／＼してはしご段の所まで来ました、があんまりひどくゆれるので下へ下りることも出来ませんから、お母さん／＼と呼びましたが返事がありません。私はゆれる中で大きなこゑをたて、泣いてしまひました。

その中におとなりのおぢさまがいらつしやつて、私をおぶつて下へおろして下さいました。それからすぐお母さんと一しよに外へ出ました。そして四つかどに立つてゐました。その中に第二回第三回と大地震が来ます。私はどうなることかとしんばいしてゐると、おまわりさんが来て、高田さんになげなさいと申しましたから、私共はすぐ高田さんへとにげました。空にはまつくろいけむりがもう／＼とたちのぼります。お父さまはまだかへつてまわりません。私はまつたく心細く思ひました。

その中に高田さんにもつてもあつくなりましたから、少しばかりのにもつをもつて池の端へにげました。その日はまつかな空をながめお父さまのごぶじをいのりながら、こほい一夜をねずにあかしました。その中に上野もあぶないと言ふので千駄木へにげるとちうでお父さまにあひました。私どもはとびついてよろこびました。又お母さまは神様やほとけさまのおひきはせといひました。それで私が、これから千駄木へにげるとちうだと言ひますと、お父さまはそれより櫻木町の寺井さんへにげることになりました、人ごみをわけてやう／＼寺井さんの家までにげて来ました。そしておにぎりをおいいただきました。私は今までこんなにごはんをおいしく食べたのは、はじめてでございます。

その中に上野の山もやけてゐると言ふことが耳にはいつたので、お父さまは、ではこゝもあぶないから又にげやうといつてにもつをまとめ又そこをにげて、天王寺のおはかへ行つて、又そこで一晚あかしました。そうして三日目の朝、せんろづたひに池袋のおぢさまの家までにげてきました。その中にゐなから、やぐや着物や色々の物を、もつてきて下さいました。私どもはづゑぶんうれしく思ひました。その中にやけあとにバラックがたちましたから、池袋からバラックへまゐりました。今ではもう學校のバラックもたち、私どもは一生けんめいにべんきやうしてゐます。こうしてりつばな人になつて、やけた大東京を先よりもつとくくりつばにしやうと思ひます。

地 し ん

本郷區 誠之尋常小學校

第三學年男

伊 藤 正 三

九月一日、學校より歸り晝めしをすまして間もない事であつた。父は次の兄をつれて一中へ行つた後の事であつた。ぼくは母と妹と三じよの間で妹の晝本を見て居た。と思ひがけも無く、あの大地しんがゆり出した。

ぼくは思はず飛び上つた。地しんが少し軽くなつた間に、ぼくたちはげんかんにはう様にして行きオルガンのそばで三人だき合つてかたまつて居た。げんくわんへ行つた後で三じようでは、かけてあつたがくようだんすの上の本がすつかり落ちた。ざしきも父がかさかけた晝やわくが皆たふれかべにかけてあつた大きな父のしやうざう晝がざしきのまん中まで飛んで居た。たてぐは一枚ものこらずしきわからはづれてたふれた。ぼくはこのうちがつぶれるのではないかと思つておそろしかつた。

地しんがしづまつてから父と兄の事が心ばいになつた。そこへ女子しよくげうの生とであるぼくのいとこがうちの近所の平野大佐と一しよに歸つて來た。しばらくすると家てい組合の人が來て今女子大學校の高いたてものがたふれて自てん車に乗つて居た人が下じきになつて死んだといつたので父や兄の事がますます心ばいになつた。

ふとにはを見るとき、煙がもうくと盛に吹きこむので母は近所が火事だ、これはあぶないといつて外へ聞きに行つた。火事は近くの學習わんだとわかつたので大事な物をふろしきへつづんでいつでもにげ出せるやうにして居た。仕合はせな事には火事は學習院丈ですんだ。

二時半ごろになつて父たちは歸つて來た。ぼくたちもやつと安心が出來元氣も出た

となりの人たちが八時頃にまた大きな地しんがあるといつて居たのでぼくといこと次の兄と妹ときけんの無い近くの野原へ行つた。が父がすぐよびに来たので又うちに歸つた。そして門のそばでテーブルを中にしていすにこしをかけて居た。父や母は家の中のさうじにかゝつた。

いすにこしかけながら向ふを見ると空はまつ赤になつて氣みの悪い白い雲がむくむくとやつて來た。

皆はどこかの山がふんかしたのだらうといつた。その晩はどこの家でも野原やあき地にテントなどをはつてねたがぼくのうちではいつもの様にさしきでねた。

一日二日三日は東京の様すが少しもわからなかつた。四日目に父は方々の焼けあとを見に出かけて行き或所では〇〇人の殺されるのも見たさうだ。

十日目にはなにかへ行つて居た上の兄がくくのをぢといことこの父とに連れられて歸つて來た。誰もパンやくわんづめをふくろに入れてしよつて居た。

十一日には母と妹をるすばんにしてぼくは皆と一しよに焼けあとを見に行つた。上野から神田、日本橋、丸の内へ廻つて見た。朝から夕方まで一日歩き通しに歩いた。これまでさびしかつた所もにぎやかであつた。皆焼けて同じ様な焼野原となつてし

まつた。何もかもゆめの様に思へた。何萬といふ人が死んだりたく山な學校が無くなつたり思つてもぞつとする事ばかりだ。いつになつたらもとの様な東京になるのだらう。

九月一日の大地震

本郷區 誠之尋常小學校

第三學年女 木村百合子

汽車は箱根の長いとんねるのくらゐ所からやつとぬけ出して明いべつせかいのやうな所へ出た。向ふには廣々して美しい海が見える。この次は大磯だ。

もうこゝまでくれば東京は大分近くなつたとよるこんでゐるときうに上下左右にゆれて來た。とてもたつてゐられない。皆はゆれるまゝ下にすわつてごろ／＼ころがつてゐた。そのやうにして長い間ゆられてゐるうちあつと思ふまによこにがたんとたふれたたふれてもまだがた／＼ゆれてゐる。

車内が坂になつたので上のまどへゆくにもすべり落ちてしまひ足ばさへない。

まどから下を見ると高くとてもおちられない。人々はもうたいいてい下りてしまつた。私はお姉様にまどまでのせてもらひ下の人にはうけてもらつてやつとおりた。

そして汽車に近くない安全なばしよに、にげるために皆たんぼを通つて向ふの道ににげる私たちもその人たちについて行つた。

はじめ汽車の中にあるときはだつせんとばかり思つてゐたがおりてもやはりゆれたんぼを通る時等は足がふかくうづまるので始めて地震だといふことがわかつたうしろのほうのはこはめちや／＼なので死んだ人もたくさんあるやうであるそこから人の泣き聲たすけをよぶ聲等きこえる。

にもつをもつてやると道に出た。人々は今までのおそろしかつたこと等をかたつて大さわぎしてゐる。その内に自動車が一だい來た。何をするのかと思つてゐるとけがした人や死人をはこぶのである。きみがわるいしくさいしとても見ておられない。

これ等の人たちをかたづけてしまはれたころはもう夕方であつたあたりがぐらくなつてから私たちのつてゐた汽車を見た時はあかるい時見たよりもなほものすごく見えなかつた。

私たちはお母様たちといつしよではないのでなんと心さびしかつたがお姉様のお友だちがお母様たちといらしたのでその方と一しよにしていただき夜は大きい松の木の下にわらをしいてねることにした。

夜がふけるにつれて東京の空があかく見えて來たなにかときけばそれは横はま横すかの火事だといふ。見るまにだん／＼ひろがつて大分大きいらしい。あたりの人もひるまあんなにたくさんゐたのにいつのまにかどこへかへいつたのかずつと人数がすくなくなつた。

やぶ蚊におそはれながらこわごわのてんにねて夜をあかした。朝ははやくおきてしたくをし東京へむかつて歩いてかへることにした。

七時頃皆にもつをもつてでかけた。のりものがないといふことであるから家にかへるまであるかなければならないかと思ふとかなしくもなり又私にあるけるかしらと思つた。

わたしにのつたり家のたふれたやねの上や木のたふれた上等を歩いた。夜はじんじやのはいでんやよそのうちのテント等にとまつた。よこはまのやけあとののはひの中や〇〇人の殺るされてあをぶくれになつたきみの悪いやうすをしてたふれてゐるそば等を通つてやつと五日の日東京へかへつた。

かへると中人々にきけば東京はぜんめつであるからとてもかへつてもだめだといはれたがそれでもと思つて來て見ればそのとほりどこを見てもやけのである。あのこの

あひだまでそびえてゐた大きなまゐるのうち等のたてもおほかた火のため地震のため、めちやく／＼になつてゐた。うちへかへると皆なみだをながしてよろこんでくれた私もうちなどはやけてしまひお父様やお母様もどこへいらしたかわからなくなつてゐるだらう。と思つてかへつてきたのにみんなおぢようぶでいらつしやつたのでほんとうにうれしかつた。

こんなおそろしいめにあつてもすこしもけがをせずにあつた私共はよいけいけんをしたのであるからこれから一しんにべんきようしてえらい人にならう。

地震後ノ東京

本郷區 本郷尋常小學校

第三學年男

田邊耕三

美シイリツバナ日本一ノ東京モアノ九月一日ノオソロシイ地震ヤ火事ノタメニメチヤ／＼ニナツテシマヒマシタ。見ワタスカギリノ廣イヤケノノ原ニハ所々ニマツ黒ナ木ガノコツテ居リマス。「ニコライ」ノダウガ形ダケノコツテ居リマスノハサミシウゴザイマス。僕ハ學校ノイキト歸リニソレヲ見ルトカナシクナリマス。ベンリナ電車モ

大ヘンコンデノレマセン。

又カケタイ所ニモ電話ヲカケラレマセン。皆コノゴロハ大ヘンフベンチ東京トナツテシマヒマシタ。コノゴロ家ヲタクサンタテテ居リマスガソレハ皆「バラック」デ元ノ東京トクラベルト見ルカゲモアリマセン。ホンタウニカナシイイヤナ東京トナツテシマヒマシタ。僕たちハコノ東京ニ居ル小國民デスカラ一心ニベンキヤウシテリツバナ人トナリ早ク元ヨリモ、ズットリツバナリツバナ東京トシナケレバナナイト思ツテ居リマス。

思ひで多い九月一日

本郷區 本郷尋常小學校

第三學年女

太田正子

大正十二年九月一日は、花のみやこといはれてゐた東京におそろしい大地しんや大くわじのあつた日であります。この日はちやうどおけいこはじめのあつた日であります。私はなつかしい先生やおともたちとおあひしておもしろくうちへかへつてきました。ところが十二時ころでした。ごはんをすましてねえさんたちとおそんでゐました。

ところがきふにでんとうのひもが天じやうにもとどくやうにゆれます。ふしぎに思つてゐましたら母がきふに地しんです皆たんすのまへにしやがみなさいと言ひました。父がゐるすです。それをしんばいしながらみんなたんすのまへにしやがみました。そとでは大ぜいの人々がこゑをそろへてないたりさけんだりしてをります。私どももそとへでました。しきりにどんがきこえます、なるたびに地しんのしらせかと思つてさわぎます。

父がかへられ皆かはりのないのをあよろこびになりました。

いつのまにか火のけむりが四方に見えます。あとできいてみるとそのけむりが人のいのちをとつたり人のすむ家をやいてしまつた火のけむりなのです。私のうちのまへはひなんする人や道具で一ぱいになりました。私どもも火をうしろにみながら小石川の方へにげました。と中で日がくれたのじくしました。

どこの家も一皆火をけしてそとへねました。

方々の空が一晩中まつかでした、夜が明けてうちのやうすを見にきましたら私の家はやけてゐませんでした。たいさううれしうございました。私の學校もやけませんでした。

二日たつても三日たつてもぢしんもくわじもやみません。しかしだんくよわくなつてきました。

さいはひに本郷は大學のやけたのをしいことですがほかは少ししかやけませんでした。お家もやけお父さんお母さんにわかれた人たちはこの寒さをどんなにこまつてゐることだろうとかはいさです。私どもは一心にべんきやうをしてはやくにぎやかな東京にしたいとおもひます。

バラックを見る一日の刻

本郷區 駒本尋常小學校

第三學年男

安岡 供 勝(十一歳)

このまへの日曜日にお父さんと上野公園に行きました。

まづ巢鴨驛から省線電車にのりますとまもなく萬世驛につきました。萬世驛が木のかげに、かくれるとほねばかりの國ぎかんがうすく見へました。

下には市内電車を通つてゐました、間もなく省線電車がバラック建ての上野驛につきました。

上野の大佛の首がをつつておました、それから菊人形がありました、菊人形のうらにはよこはまの海岸がつなみにさらはれさうになつてゐる畫がかいてありました。西郷さんの銅像はぼろを着たやうにかみがはりつけてありました、こゝからは東京のバラックが一目に見えます。すぐ下は上野廣小路で松坂屋のバラックが立つてゐます、とほくの方には焼けのつた浅草のかんのんさまが白いバラック家根の中にめだつて黒く見えます。私とお父さんとはバラック立のおしるこやで、おしるこをたべました。

大正十二年九月二日の晩

本郷區 駒本尋常小學校

第三學年女 鷺 田 琴(十一歳)

九月一日のさわぎは今日になつても止まなかつた。〇〇人が本郷區へは入つてつけ火をすると云ふ事を聞いた私はもう命がなくなるかと思つた。たきの川の川の家へ兄さんにつれられて行つたが、やつぱりこわくて野宿をしてゐた。

空は一面に火の海の様である、近所の子供は泣きさわいでゐるがどうする事も出来な

い。大人の人がけいはいをはじめたので少しは安心をする事が出来た、しかし早くこのさわぎがしまればよいと思つて神様にいのつた。

哀れな避難民

本郷區 富士前尋常小學校

第三學年男 椿 文 雄(十歳)

九月一日の大地震で東京はたいていやけてしまつた。ぼくらは家も道具も焼かないのでどんなにしあわせか分らない。

家が焼けて山の手の方ににげる避難民の哀れなすがたは、何とも言へないほどであつた、或人は焼くをして車につまれてにげる。或人は目をいためたと見へて、手で目をおさへながらにげる人もあつた。

そんな人はせいねんだんにパンとぼろなどをもらつた。もらつた人はうれしさうに幾度もおじぎをして後をふりかへりながら行つてしまつた。

四日たつても五日たつてもまだ通りをぞろぞろと避難民は通つてゐた。方々では水をやりたり色々せはをしてゐた。

梅の花

本郷區 富士前尋常小學校 第三學年女 萩原まり子(十一歳)

秋はきれいな青空から 日を受けて

みどりの松のあいだから 枝を出し

こぼれさうなつぼみが

白いお口をあいて 空にこくさいたお花から

いかにほひをおくつてゐる

九月一日

本郷區 根津尋常小學校

第三學年男 加藤晴雄(十一歳)

ぼくが九月一日に學校からかへつて母がしたくしてくれたやきどうふとさといものところかしておひるの御はんをいたゞいてゐますと松風のやうな音がしたかと思ふとぐらぐらとごき始めました。その音のすごさと言つたらありませんでした。うちの道具は茶だんすも神だなのおさかきもほとけ様の金など大てい下へ落ちまして外の道具も大てい前へころんだり落ちたりしました。

ぼくはつぶされて死ぬかと思ひました。母はねてゐた赤んぼうをだきあふないからといつて鐵びんの水を火ばちの中へあけましたするとぼくの七つになる妹がゐませでした。名をよびますと横丁からはだしてゐるのを見さんが連れて來ました。その時お父さんはぬづの三島へいつてうちにはゐませんでした。内申の者が戸だなの前へ集つてなむみやうほうれんげきやうをとよなへてゐました。

近所の人が電車通りへ出るのでぼくらは電車通りの方へかけ出しましたがぼくの裏の家が三十軒ぐらいつぶれたので行かれませんから若菜さんの内の方へかけ出しました。とちゆうではかはらやごみで歩きにくうございました。やう／＼の事で若菜さんの所まで行けました。そこには戸板が引いてありましたからむしろをひいて荷物の上へこしをかけて近所の人たちとかたまつてゐました。その中も十分おきぐらいにぐら／＼とうごきます。そのたびに母は「そら来た」「そら来た」と言つておどろきます。すこしたつとぼくだんの音がして火事かもえ上りましたのでおそろしいやうです。夜になつても、その夜は何も食べずにねました。あくる朝になつても、火はもえてゐます。はらがへつてたまらないので、麥めしのおにぎりを母にもらひました。そしてぼくもやつと元氣づきました。ぼくの家の方へ火のえが飛んで来るので、そこにもゐられずごんげん様へにげる用いをしました。その道も大へんな人で、ふみ殺されさうになつてにげました。

あくる日になつてやうやく火事は消えました。ぼくの家は焼けると思つてあきらめたのがたすかつたので喜こんではいりました。すると死んだと思つたお父さんがお歸りになつたのでゆめではないかと皆喜びました。

た。

お父さんも「子供にけががなくてよかつた。」と大そう喜びになりました。

どうしてお歸りでしたかと尋ねると、三島からぬまづまで来て外國船で横はまへ来てそれから歩いて来たのださうです。

お父さんは今毎晩のやうにやけいに出てゐます。

このおそろしい地震のあつた大正十二年九月一日は何年の後までもわすれる事が出来ません。

大地しん

本郷區 根津尋常小學校

第三學年女

林

芳

江(十一歳)

九月一日に學校からかへつてごはんをたべてゐると急にがた／＼いつてきましたから地しんだと思つてにはへはだして飛出しました。いつもの地しんならそとへ出ればゆれないのにはへ立つてゐてもがた／＼ゆれてゐました。その中にやつと地しんがやみました。うちのすぐ前がさしやのせんろなので今度はそこへ出ました。すると今度

は火事になりましたので荷物を出しました。そして私と姉さんとお母さんと三人であちが原へにげて来る道でもえてゐるのがよく見えしました。そしてあちへにげてゐると今度はだん／＼とつちへ火がきたので汐入の土手へ来ました。すると今度はつなみが来ると言ふさわぎです。私はほんとうにどうしてよいかと思つてゐました。兄さんがむかへに来てもう家はやけたとおつしやつた時私ばかりがかりました。そして今度は船へ行くのだといつて船へ行きました。すると今度は石油ぐわいしやに火がつくとこゝいらは一面の火になると言つて大川の方へ船を出しましたがもし地しんがして船がひつくりかへると大へんだと大川へは出ないで、大川の前で船をとめました。ちやうどその前に大きなえんとつがあつてもしそのえんとつがたふれるとこゝまでとゞくと言ふのもうこわくてねられませんが、前には石たんがもえて大そうあかるくでんきをつけたやうでした。

九月一日の大ぢしん

本郷區 逸分尋常小學校

第三學年男

安 藝 俊 雄

始業式をへて家へかへつて遊んで居ると、とつぜんぐら／＼と家が動き出した。そらぢしんと言ふので外で遊んでゐた弟はワア／＼泣きながらかけ込んだ。僕はずいぶん大ぢしんだなと思つた。ぢしんはなか／＼やまない。その中に少し小さくなつた。

其の時お母さんもだいどころからとんで来て三人でかたつてゐると、又大きいゆれかへしが来た。こんどこそはつぶれるかと思つてお母さんの顔を見るとまつさをになつてゐた。

そのうちにお父さんやしんるいの人が出来た。あたりを見ると色々なものがちらばつて、ようだんすはたふれる。金魚はこわれる。かべはおちるし大さわぎでお店の人やお父さんがさうぢした。その内がすがでないので、お母さんはまきでこはんをたいて皆でたべた。日もだん／＼くれて夜になつた、こわくてなかなかねむれなかつたがいつかしらねてしまつた。

大五十二平次氏一日

本郷區 第三

二六五

大正十二年九月一日

本郷區 追分尋常小學校

第三學年女 勝 浦 照 子

ながい夏休がすんでひさしぶりで先生やお友達のゑ顔を見て家へ歸つてきますと、せん賣局の鈴がなりました。お母さんが御飯ですとおつしやいました。するとミシミシといふ音がしてつづいてガタ／＼とゆれるかと思ふとたんすやをりは皆たふれてしまいました。妹は皆泣きだしてしまいました。お母さんも京子をだいて根津様がよかろうと言ふことで近所の人も大勢かけだして行きました。向ふの方を見るとかべや瓦の落ちたほこりでひどいごみでした。そして早速ござや毛布をもつてきてそれを木の根の處へしいて皆すわつてゐましたが何だか、こわくてたまりませんでした。

その中に大學が火事だと言ふのもうぶる／＼ふるへてゐました。火事は益々盛になつて物凄うございました。家でも大切な物を荷ごしらへしてにげるようにをしました。が幸にやけませんでした。

十日程たつてお父さんと焼跡を見學致しましたらたくさんの方々がありました。大そう御氣の毒でした。今までにぎやかであつた處も、野原になつてしまいました。私もそれを見た時なみだが出ました。

私はねづみです

本郷區 眞砂尋常小學校

第三學年男 種 田 三 郎(十一歳)

私はねづみです。今年は人間界ではねづみの年ださうですが近頃はねこがたくさんふへたのでぶつさうです。おととひ仲間の者が人間界のおもちをとりにつたらいじわるのねこが殺してしまつたといふことがねづみしんぶんにてをりましたからぼくたちもごみためのかなのくさつたのを今はたべてゐますが又近頃はねこいらすとかいつてたべものの中へ入れてぼくたちをころすものが出來たのでこまりました。この

間もともだちのちう吉がとだなのおかしをたべたらそこですぐしんだといふ事です。
今ぼくたちの仲間では大さわぎです。今お式へ行く事を決めた又お式には行く事
は出来ぬ。お式には行く事。お式には行く事。お式には行く事。お式には行く事。
今朝のぢしん

本郷區 眞砂尋常小學校

第三學年女

増 田 愛 子(十歳)

私は今朝のぢしんの時は外へはだしで出ました。

ずるぶんゆれたとみえてかべをはつた紙もみながれてしまひました。

私はぢしんがやんでからほとけ様からろうそくをださうと思ふと又ゆれました。そ
れからおぶつだんをあけてはなたてやあかさざりやお菓子を上げておくたかつきやお茶
わんはみんなおちて水がこぼれてぶつだんの中は水だらけになつてゐました。

それから私の家の前のお宮様のお山の門をあけました。私は行きませんがみんな近
所の人は山へまゐりました。私の家の弟は二人ともぢしんで目をさましましてそれか
ら一度もねません。

ぢしんが弟たちの目さまし時計であるやうにうちがうごいたのであります。目がさ

し時計は時間に来るとりん／＼と来ますがぢしんはさううまくはいきません。

私の家はふだんと變りませんがつづれて火が出たとみへてじやうきぼんぶが行きま
した。

私はぢしんがこわくてたまりません。もし私の家がつづれて火が出たらどうしやう
と思ふとこわくてたまりません。

私の弟などぢしんがよく／＼あたまにしみたとみへてぢしんがするところがつてな
きます。

私はぢしんほどきらひなものはありません。

大地震

本郷區 千駄木尋常小學校

第三學年男

丸 山 嘉 朗

「明日は二百十日だな」
と僕はいろいろの事を考へながらねてゐた。すると、とつぜん家が持ち上つて横に、
ゆれ始めた。ぼくは、かついでねて居たが、あまりゆれかたがはげしいのでげんかん

まで出た。

すると母と兄さんと弟と妹が、まつさをになつて走つてきた。

母は僕に着物を着せて藤堂さんの原へひなんした。おひる頃には空はまつかにそまつた。四時頃に芳子さんと稻子さんが歸つてきた。

お父さんに御話をきくと地震の時は、あざぶにゐていろいろあぶない處を通つてにげて來たと言つてゐた。

二日の朝「〇〇人がつけ火しますから、つかまへて下さい、もしていこうしましたら殺してもかまいません」と言つて來た。

二日の晝頃「あいそめ橋まで火が來た」とか「いよ／＼林町もあやふくなりましたからにげて下さい」とかうそばかりいふ人が多かつた。

二日のばんは空が赤くてこわかつた。三日の明方駒込橋のそばの岩崎さんの原へにげた。

お晝ごろには雨が降つた。もう火はきへただらうと思つて家へ歸つた。

大地しん

本郷區 千駄木尋常小學校

第三學年女

高浦千枝子

九月一日の九時に私は學校からかへつてきました。

そうしてお友達を二人よんできて勉強してゐましたらぢしんが始まりましたので私もお友だちと皆なでだいどころへいつてお母さんのそばへかたまつてしまひました。

私はおかあさんから、おかみだなのあぶらだのほとけさま様の物がころがるやうな地しんは家がつぶれると聞いてゐました。その時はほんとうにお花さしやおせんこうを入れるものがやんだのでまへのようげん寺のかきねをやぶつてひなんしました。その内に、はい色なけむりがもく／＼上つて來ました。

そのけむりは大がくがやけてゐるとききまして私は實にかなしうございました。

その内にたいほうの音が聞えて來ましたその度に地しんがあるのでこれは地しんのけい報だとみんながいつてゐました。ほんとうに音のする度に地しんがありました。

今度は白けむりがもく／＼出て來ました。そのけむりはちつともうございせんまし

た。だんぐり日がくれてくるので私はかなしくなりました。その内に日はとつぷりぐれてしまひました。その時お母さんが家が見えないとしんばいだからといふので、おとなりのおばさんとさうだんして、私の家の前の處へはりいただの、とだのをしいてその上へふとんをしいてねました。

けれ共私はねられないので起きてゐました。

空を見るとまつかになつてゐました。にかいの戸があかるくなつてゐました。

さうしたらおとなりの、しんるいのおばさんがひさちやんとよつちやんととみちやんと四人でにげてきました。

とみちやんはかばんをかけてはつ／＼といつてゐました。お母さんがおばさんにきいてみまするとまだやけませんけれども、近くまでやけてきましたからあぶないといはれたのでにげてきたのですとおつしやいました。

ひさちやんは、かあちやん／＼となき出してしまひました。その時私は大そうかはいそふになりました。

夜中におきてみたらひさちやんのおばさんが内のお母さんと話をしてまゐりました。私

があとで聞いてみたらとう／＼やけてしまつたといつてゐたのでありました。

さをのぎやうれつ

本郷區 元町尋常小學校

第三學年男

金子清人

はれつゝいた天氣はやはり昨日の様にはれてゐた。その日は丁度一月廿六日で、皇太子殿下と良下女王殿下の御せいこんの日で花火が「ぼんぼん」とはれた空に上つてゐた。

花火の中から時々「らつかがさ」などが下へ下へとあちてきたその「らつかがさ」などをとる積りで皆んなはさを持つてあちてくるのをまつてゐた。僕は皆んなの行方についていつた。そのうちに細いろうじの所にあちてこようとしてゐる所、皆んなはさををもつてあちる所へかけだした、さをでとろうとしてゐる。

それをみるとまるで「さをのぎやうれつ」見たいで僕ははじめの方であつけにとられて見てゐた。

そのうちに又二度目の花火の中から人形がでてきた、皆んなは元の様にさををもつ

てまつてゐたやがて下の方へおちてきた。皆なは又おちてくる方へかけだした。前からは寒い風がひゆうつ／＼とふいてきた。もう夕方では西の方へはいろいろとしてゐた。僕はさむいのもわすれて一生けんめいにかげだした二たび「さをのぎやうれつ」がはじまつた。人形は電せんにひつかかつた、丸太をもつてくるやら電しんにのぼりつくやら大へんであつた。電せんから人形が下へおちてきた。さうすると下の方でとりつくりをしてどぶにおちるやら大へんであつた。その内に日は西にはいつてしまつた。

おそろしかつた地震

本郷區 元町尋常小學校

第三學年女 廣田清子

學校からかへつてくると間もなくお晝になりました。私たちは、ごはんをたべ様とするとた／＼みがむく／＼としたお母さんは「おや地震だね」と言ふまもなくむく／＼がた／＼とゆれました。

お父さんは「これは大きな地震だ皆此の柱につかまつておいで」といひました。私はお父さんにかじりつきました。私も弟もまつさをになつてふるへました。其の中に神だなの大神宮様はひつくりかへり、まことにひどいありさまでした。やう／＼のとで地震はしづまりました。お父さんはさあ早く御いで、出るのは今の中だ「さあ早く／＼」と言ひました。私共はむ中になつて外へとびだしました。

やつと一いさして向のどてを見るとどうでせう松の木は見る／＼内にもへてゐます私共はとう／＼じゆん天堂の前まで来てしまひました、それからしはん學校の前にはいりました、はいつてから五分たつたたぬ内に順天堂に火がついたといつてゐます。

私たちは松住町を通つて上野へにげました、上野へついたのは夕方でした、夜になるとどこの火かえん／＼ともえてゐます。そしてあちらでもこちらでも大きな聲をして名前をよんでゐます。

夜があけるとお父さんやお店のものが食ものをさがしにいきました。その中にお父さんとお店のものがかへつてきましたのでそこをのいて菊池のうちへきました。

そこは〇〇〇〇人がきたといふのでとうとうやけあとへにげました。

東京市復興

根岸尋常小學校

第三學年男

石井善三

震災後東京はだん／＼復興しました。上野の山から見るとバラックの大東京で見わたりすかぎりバラックがならんでゐます。ただ十二階だけのないのがあしいです。だが時々地震の來るのにはないほうがよいです。こんだは前の東京よりよくなりさうです。私はやけないからいいですがバラックの人はさぞさむいせう。

早く前の東京のやうにしたいと思つてゐます。それにはぼくたちが大きくなつてお金をもうけてどん／＼家をたててりつばな東京にして外國人をおどろかせたいものです。

悪魔の相談

下谷區 根岸尋常小學校

第三學年女

小柴芳

火は地震さんをつむじ風さんと相談した。

火「ねえ、地震さん今度日本のよい所をねらつていぢめようじゃありませんか。」

地震「そうねえ、してやりたいわねどこにさせよう。」

つむじ風「まづ東京それから横濱と横須賀鎌倉ね。」

地震火「えい。」

火「いつしませう。」

風「九月一日から三日あたりまで、きつとね地震さんは十二時よ。」

これは八月三十一日でした。

九月一日十二時、地震は思うぞんぶんからだを動かします、火はその後から横濱に行き子供を方々へやつた風は火事の所をぶ／＼と吹いては火事を大きくする、人が困つてゐるのを三悪魔は喜んでやつてゐるのである。

火はちやうど坂本一丁目あたりへ來た時心の中で思つた「あゝくたびれたけどもつとやらなければ風さんと地震さんにすまない。」と思ひかへした、くたびれた所へ水をかけられたからたまらない、とう／＼消されてしまつた。

四日の晩又も風の子供、火の親、地震の親がよつた、風の親はしきりに方々を飛び

まはつてゐる。地震の子も時々頭を動かす、火の親「おしくやしかつたとうしくやくそくをしたどけ焼くことが出来なかつた。」とさもなくやしさうにいつた。

地震「あれだけならたくさんよ。」

それから後は火も子供を出し地震も小供、風も小供だから三悪魔の中では大〇〇と名のつくやうな大きな事はなかつたが、これから後どうだか分らない。

ぢしんの思ひ出で

下谷區 忍岡尋常小學校

第三學年男 矢澤 泰造

私は長い夏休みもおはりまして始て學校へ行くので、私はうれしくて朝早くから學校のしたくをして友だちといしよに行きました。そして校長先生からいろ／＼のお話をきいて内へかへつて來ました、おひるのごはんをたべてお母さんと學校のお話をしておますと地しんがゆれて來ましたのでみんながどろいて外へにげ出しました。近所の者もお友だちもみんな前のどうろにあつまりました。そうすると大學から火事がおこりました、私の家は近いのでしんばいしました。

其の夜はみんなでどうろにねましたが、ねむれませんでした、淺草や神田の火事で空はまつかにこげてゐるのを見てこわくなりました。

其の次の日に私は家の者と一しよに田ばたへにげて行きました、とちうは人や車が山のようにこみ合つて中々あるけませんでした、かへつてきてみると私の家は幸やけなかつたのでよろこびました、又私等の學校もやけなくてうれしうございました。

バラックを見て

下谷區 忍岡尋常小學校

第三學年女 見崎 須美

昔のむかし野の原とかもつたとうじの東京はこの先どうなるかと思はれたほどでしたが、このせつたいぶおちついて家もバラックがたくさん出來てきました、いろ／＼の賣店もおほくひらかれてあります、私はいつもこのなま／＼しいバラックを見るたびにあのおそろしい九月一日大しんさいのことが思ひだされてなりません。

私はあのおそろしい中にも、親や兄弟、姉妹とも別れもせず家もやかれずしあわせに學校へもかよふことができるのでうれしいと思つておりますが、私たちの

仲間の中には親に別れたり兄弟に死なれたりしてさびしい日を送つてゐる人がどれほどあるかわかりませんが、又トラックに雨風をようやくにしのいで居る人もたくさんあります、どんなにつらくかなしいでせう。そんな事を考へると私はむねが一ぱいになります、そういふ人にどうぞしあわせがむいてくるやうにといのつております。

地 震

下谷區 練屏尋常小學校

第三學年男 若 林 玄 修

地震がゆら／＼ ゆれて來た

たなからどた／＼ にもつがあつこちる

電燈はぶら／＼ おどりだす

みんなはおどろいて 青いかほ

汽 車

汽車ぼつぼ 汽車ぼつぼ

けむりをはいて どこへ行く

さびしい／＼ いなかへか

てつきやうわたり 山をこへ

遠い／＼ いなかへか

おせつくが近づきました

下谷區 練屏尋常小學校

第三學年女 大 野 信 子

さむい／＼と思つてゐるうちにお店の日なたにある梅がひらきはじめました。

新ぶんのこうこくに松坂屋の御ひな様が出て居ます、去年の地震の時に何も出ませんでしたので学校のどうぐは學校でいたゞきました。羽子板は年の市でお父さんに買つてもらひました。お人形は角筈のおぢさんにいたゞきましたがおひな様は何にもありません、淺草のおばさんに豆びなでも一つ買つていたゞかうと思つてゐましたがお母さんが忙いのでつれていつていたゞく事が出来ません、その内にもうじきお節句がきます、そうしたら下の様なおひなさまをきれいに紙でつくつておまつりをしたいと

思ひます。

去年の思出

下谷區 下谷尋常小學校

第三學年男

井上正一

九月一日は父さん母さんといつしよにうらのあきちへひなんしましたが、二日の朝は火のけがほとんどなくなりましたからあんしんして家に歸りました。午後になりまずと又火が風にあふられてだんだん家にちかづいて來ましたのでおばあさんと、いつしよに車坂へにげましたが又ここもあやふくなりましたから、上野の山へにげ父母にはぐれてしまひましたどこをさがしてもゆくえがしれず食物やのどをしめす水もなく泣々こうじ町へ行きましたが、めあてのおばさまの家は焼けてゐましたのでくだんをうろろしてゐましたら、ふじみ小學校へしゆうようされました。

ぼくはふじみ小學校へいるあいだ早く父さん母さんにあひたいと思ひましたが六日たつても、七日たつてもようすがわからないのでお父さんもお母さんも、もうしんだと思ひましてがつかりしました。やうやく十日目にひなんさきがわかりました。所を見るとたきの川上中里八番地にあるといふことがわかりましたのでぼくは早くお父さんやお母さんにあひたいと思つて、うれしくてうれしくてたまりませんのでをどりして車にのつてたきの川まで來ました。父母はじめ一同ぼくが歸つて來たのをゆめかと思ひなみだをながしてよろこび合ひました。その時は今までのうちで一ばんうれしいことでした。ほんとにうれしくて私は泣きました。

やけた人形

下谷區 下谷尋常小學校

第三學年女

田中通惠

私の人形よい人形

けれどもとう／＼やけちやつた

今ごろどうしてゐるだらう

あつ／＼とないたらう

あの火の海のまん中で

「水持つて來て。」と言つただらう

下谷區

二八三

だあれもゐない家の中で

しくしくしくとないたゞらう

私のかはい、人形が

あついで火の中で

やけてとうとう死んぢやつた

私の人形がはいになつた

かはいそうだとおもひます

僕のともしぢ

下谷區 東盛尋常小學校

第三學年男 後 藤 賢 三

僕が一番好きなどもだちはふぢさわ君とあいざわ君です。あいざは君の家と僕の家とはしんるゐみたいにつきあつてゐます。ですからいつでもあいざわ君の家へべんきやうしにいけます。さうしてさんじゆつや讀方をしてわからない時はあいざわ君のねえさんにおしへてもらひます。書取の時にもあばさんが「鐵」なら「鐵」と言ふと僕とあ

いざわ君と何にもみないで鐵と書きます。それですからいつでもあいざわ君の家へいつてゐます。ふぢさわ君の家とはほいのであんまりあそびにはいきませんが學校で仲よしになつてゐます。

なつかしき友へ

下谷區 東盛尋常小學校

第三學年女 長谷川 勝 英

なつかしい、宮古様しばらくごぶさたいたしましたわね。あの雪のふる日二人はかなしい、わかれをしましたわね。まだあのことをおわすれにならないでせう。函館にゐた時二人はきやうだいのやうにしてゐましたわね、それもいまでは二人ともはなればなれになりました。けれど、私はあなたのことをわすれませんわ。あなたもどうぞ私をわすれないで下さいね。

こちらはあたたかです。けれどなんとなく冬のやうな氣がいたします。そちらでは今雪のふるところでたのしい、ゆきすべりをしてゐるでせう。私は今學校のつく

ゑの前でこのお手紙をかなしくかいてをります。それではこれでふてをさします。

二月二十日 東京の一人の友から

大ぢしんがあつてからもう五月餘にもなりましたがまだあのおそろしいことは忘れ
ませぬ、今は池の端のバラックにゐますけれ共内であそんでゐたりねてゐたり學校へ
來たりしてゐる間はこわかつた事も忘れてしまひます。
ぼくの一つのかなしい事はぢしんごお母さんがなくなられた事ですけれど兄弟が全
部で六人ゐますからあまりさむしくはありません。皆さんはうちをやかれた人もあり

下谷區 入谷尋常小學校 川 穂 英

下谷區 第三學年男 野 元 遂 志 雄

ませうが命があるのは何よりけつこうです、學校の道具や着物なども大阪や其の他の
方々から送つていたとききましたでせうから別に不足はないでせう、ぼくのうちには一
ばん小さい子が四つ其の上が六つです、其の六つと四つの子がやんちゃでこまります
おあしをきれいといふからいつもやりませんがそれがかんしやくをおこしてゐるときだ
とそのおあしをどぶの中へほうりこんだりして手がつけられませぬ。
皆さんの家にもきかない子がゐますか、私は此の弟のおもりをするのに本當にほね
がをれます。

ぢしんの日

下谷區 入谷尋常小學校

第三學年女 高 見 澤 靜 子

九月一日學校からかへつて私がおひるのどはんをたべてゐると家のみし／＼とうご
き出しました、いつもの様な小さな地しんだとまたどはんをたべてゐましたするとだ
ん／＼大きくなつてしまひには家根の瓦がばら／＼あちたり、うらの方がつぶれてし
まひました、かはらのおちてこないすきを見て家をとび出まして入谷町の通りへ出ま

したがだん／＼淺草の方からもえて来る火が近くなつてくるので上野の山へとにげました。こわくて／＼たまらないのでこんどはやけあとへにげました、そこで安心して一ばんねました朝になつて方々を見るとまだ火事は止みませんそうしてゐる内に又前の方からもえてきました仕方なくたばたへにげましたやつとこゝで安心が出来ましたがあそぶ子がないので毎日内の中でもうとゝあそんでおました。

學校が始つてから日暮里へこして來まして、電車で通つてゐます學校のかへりにはきつともとわたじぶんの家のやけあとの方へ足がむいてしまひます日曜日には學校のお友達にあそびに來ていたゞくのをたのしみにしてまつてゐます。私は入谷町の方がなんだかをつかしくて／＼たまりません。

九月一日

下谷區 西町尋常小學校

第三學年男

加藤 豊松

朝からへんなむしあついであつた、學校から歸つてあへやで遊んでゐると急にあへやがゆれだした、びつくりして裏へ出ようとするけれどころんでどうしても出られ

ない。

そのうちにしきりに助けてくれと云ふ聲が聞えるぼくはあはてて柱につかまるとからかみがたほれてぼくの頭の上へかぶさつた。やがて地震が止んだからおもてへ出ると人がわい／＼さわいでゐる、其の内に火が出てどん／＼もえてくる東南は一面にまつかな煙がもや／＼してゐる、そして火はだん／＼近づいて來るおとうさんもうこれでは助かるまいとおつしやつてみんなで大いそぎで荷物をこしらへて上野の山へはこんだ。ぼくは大きなふるしきづゝみをしよつて行つた、山へのぼる時には大勢の人にもまれてたいさうくるしんだ。そしてやうやく上つた。

山へあがると人の名を呼び合つて大さわぎである、山に一ばいの人はずれも／＼ふるへてゐる、それをぼくはぢつと見てゐた。

このごろの東京

下谷區 西町尋常小學校

第三學年女

岩本 正代

わたしたちの都は九月一日ぢしんと火事でみんなほろびてしまひました。私はかな

しくもさびしくもありましたがこのごろはもうせんとくらべるとバラツクもたくさん出来たしでんしやもちんくがうくといきほひよくいかにもうれしさうなかほをしてはしつて行くのを見ると私はしらずくげんきがついてきます弟をおぶつていもうとをつれて来てやけの原の所からひろつてきたおちやわんを出してまゝごとをいたします、空は日本晴で青いびろうどうのきれをひいた様なところに赤くるびいの様なお日様が、びか／＼光を私のせなかへなげて下さいます。

二月の月には入つてからはおどうもそろつてきましたし四月には新しい入學生がはいつてきて又友だちが出来ると思ふと私は新しい私になつた様な気がします。

私は一しやうけんめい勉強してきつと外國や其の外いろ／＼めぐんで下さつた所へ恩返しをしなければならぬと心とちかひました。

震災記事四種

一 地しんから火事

下谷區 御徒町尋常小學校

第三學年男 田中正男

去年の九月一日。あの時姉さんも私もまつ青になつた、家中の者みんなふるへてゐた、家がつぶれる學校のれんぐわべいがたふれてけが人が出来た。

どこの家でもみんなでんしやどほりへ出ました、がや／＼さわいでゐる又大地しんが大きくゆれて来た、火事だ／＼と云ふ間にくろけむりがむく／＼上りだした、人が後から／＼とにげてくる、大通りが人と車で一ぱいになつたとてもあるく事は出来ないう小さな子供がはぐれて泣いてゐました。

二 にげろにげろ

第三學年男 伊藤喜代男

さんざん地しんでおどろいてゐる内に、火事だと云ふので空を見るとまつかであるたれかあぶないからにげろ／＼と云つた、母さんがさあにげるのだ早く上野の山へにげよう。

わづか三町か四町なのに一時間たつても二時間たつても中々行かれない、私たちは

荷物を持つてにげたが荷物はとも持ちきれないのですて、しまつた。

三 ひなん

第三學年男 大野一男

僕は巢鴨から板橋へにげた、何しろあの時だからお米はなし東京の食物とちがつて赤黒いごはんだ、はらがぺこぺこだからむやみにたべた、あくる日にその家のきん作さんとたんぼで遊んだ、知らんまにやもりが急に出来たのでおどろいて金ちゃんにかぢりついた、金作さんは石を拾つてやもりの頭にぶつけた、少しもがいて死んだ。ごはんをいたゞいてお湯には入つてねましたら、わるものが来た○○人が来たと呼ぶ聲が聞へました、おどろいてはねおきた村の人たちが大ぜいきた、こつちへはこないといつた、あんしんしてゐました、毎日同じところばかり見てゐるのでおなかさがさびしくなつた、東京へかへりたいお家へ歸りたいけれ共どこもかしても焼野原で學校もなければ家もないと云つた、悲しくなつた、泣きました、お友だちや先生はどうしたららふ。

四 歸つてから

第三學年男 福島正夫

あるばんおとうさんがあすかへるのだと云ひました。ずいぶんうれしかつた、早おきして兄さんと散歩しました。

どての方を一まわり廻つてからそれからごはんをたべて汽車にのつて東京へかへりました、どこからどこまで見はらしてとほくの方に富士山が見へます。

小さな家とところどころにたつてゐました、道はやけかわらや、やけ土でふさがつてゐました。

どうしても東京だとは思はれませんが、私の家は何と小さい家でせう、私の家とは思はれませんが、あたりに家がだん／＼たつて來ます、おともだちもふへて來ました、學校もはじまりました。テントです。本もなければ机もない。先生は元氣でした、本や學用品をたくさんいたゞきました、ほんとうにありがたい事です今はバラックか出來ておけいこが出來ます。

大しんさい

下谷區 御徒町尋常小學校

第三學年女 松田 初枝

今思ひ出してもぞつとします、大正十二年九月一日大しんさい丁度其の日は學校も早く引けたので私は鳥越かんの活動見に行きました、すると間もなくあのおそろしい大地しんで、私はどうなるのかと生きた心地もしませんでした。

かつどうかんの中の人々はわれ先にとあわて、一度に外へなだれ出ようとするので私も大さわぎして外へ出ました。

あちらこちらを見ますとやねの瓦ががら／＼と大きな音をしておちました、土けむりがたつて物すごうございました。

少したつとみくら橋の方からにげてくる大ぜいの人々が、車に山の様に荷物をつんだり、かついだり、さげたりして中々こんざつでした。私もあんなふうになるのぢやないかしらと思ふと心ばいで／＼たまりませんでした。

それでこわいのも忘れて家の中へは入りました、學用品をお母さんと一所に持ち出

しますと間もなく日がくれました。

夜になつて四方を見ますと一面皆火なのでおどろきました、その上電氣が消へてゐるので一層きみがわるくございました、其の夜九時頃うち中で上野の山へにげました。が途中は人や車で中々歩く事が出来ず二足歩いては一步もどるので上野まで四五時間もかゝりました、今思ふとずるぶんおかしい位です、ですがその時は一生けんめいでした、そこもあぶなくなつたので池の端へにげました、又こゝもあぶないと云ふのでとう／＼日ぼりへにげました、此の時は二日の午後四時頃で丁度私の家の焼けた頃なのでございます、其の夜おばあさんお母さんお兄さんの三人にはぐれまして、私はなげなくつて／＼泣いてゐました。

其の夜も明けて三日の朝、お父さんがはぐれたところへさがしに来ますとさがしてゐられたおばあさんとうんよく出合ひまして皆々一しよになつてなき／＼よろこびました。

上野の山から見下して

下谷區 谷中尋常小學校

第三學年男 川合融三

上野の山から見下ろすと下にはまだ焼けた汽くわん車がおいてあつた。向ふの方に兩國の國技館が一目に見える、而し十二階は影も形も見えない、震災の爲十二階がはいされたので残りをだいなまいとでこわしたからである。淺草の五重の塔はまがりもしないで立つてゐる、そのあたりを遠くから見ると鳩がとんだり止つたり大さわぎをしてゐる様にみへて面白い、下は白いトタン屋根のバラックがづつとならんでゐる、上野の山下を通つてゐる馬力の音がさわがしい。

新らしい東京

下谷區 谷中尋常小學校

第三學年女 青木貞

今思つてもぞつとするあのおそろしい大地しんと大火事とで、美しい東京をこわし

たり焼いたりしてしまひました。

お母さんに連れられて上野に行つて下を見下した時は廣い、焼野原になつてゐたので本當におどろきました。

二度目に行つて上野の山から見るともうバラックがたくさんたつてゐるとたん屋根がうつくしく輝いてゐます。

私は何だかうれしい様な氣持がしました、皆が世界一の美しい東京を作つてみると云つてゐます。

その美しい東京を造るのは私たちですから一生けんめいになつてりつばな東京を造つて外國の人に感心させ又おどろかせてやりませう。

大地震大火事

下谷區 金會木尋常小學校

第三學年男 檜野直

九月一日の大デシンノ時、私ノ家デハ皆デゴハンヲタバテキマシタ。ツノ時アノデシンデス。始ハイツモノデシンダラウト想ツテソウオドロキマセンデシタガダンダン

下谷區

二九七

ヒドクナツタノデ出ヨウトスルト、モウデルヒマガアリマセンデシタ。瓦ハ落ル、カベハ落ル、戸モタホレル、ソノオソロシイコトタトヘヤウガアリマセン。ソノ中デシンモヤンダノデニハへ出マシタ。キンジヨノ人モタクサン來マシタ。皆ノ顔ハマツサヲデシタ。

何ドモユリカヘシガ來マシタ。ソノ中向ノ方ニウスイ煙ガ出テ來マシタ。オ父サンハ一火事ダラウ、チシンノアトノ火事ハツイブンコハイ。トオツシヤイマシタ。ホントウニ火事デシタ。道ヲ通ル人々ハ「火事ダ〜」ト言ヒナガラ走ツテキマス。

火ハ三方カラ私ノ家ノ方ニ進ンデ來マス。始ハ上野ヘデモニゲヨウカト思ツテオリマシタガ、上野ノ方ハモウ一メンノ火デ、火ノナイノハ一方デス。火ハスグニ車庫ノ裏マデ來タノデニハデゴハンヲタキニモツヲ出シテ皆デーツツシヨツテシマヒマシタ。火ガスグソコマデ來タノデゴハンノデキルノモマチキレズ、半ニエノヲ、バスケツトノナカニ入レテソノ上ニ梅干ヲ入レマシタ。

ソシテ王子電車ノ線路口ニヒナンシマシタ。ソノ道が大ヘンコンナンデシタ。道ニハ人ガ一バイキテ向フヘ行クモノモアレバコチラヘ來ルモノモアツテドツチヘイツテヨイカリカリマセン。荷馬車モ何臺モイツテ戦争ノヤウナサハギデス。ソノ夜ハ線路

ノ上デネマシタ。

朝起キテミルト火ガキヘタヤウナノデウチニイツテ見ルト幸ニ二ケン向ウマデヤケテウチハ無事ニ殘ツテオリマシタ。

ナニモワカラナイニハトリハ勢ヨク鳴イテキマシタ。

忘れられないこと

下谷區 金曾木尋常小學校

第三學年女 小野里勝子

去年の大地震の時、私はお父さんにつれられて上野の山へ逃げました。火事が止んでからお家に歸つて見るとかなしいことに今までのお家はありません、しかたがないので日暮里のおちさんのお家へ行つてお世話になつてゐました。

その内にやうやく小さなバラックが出来ましたのでその所へ歸りましたけれども本もちやうめんも何もありません。私はかなしくなつてひとりでなみだが出ました。學校が始るやうになつて方々からおくつていただいたくさんの品物を先生からいたゞいて私どもはずいぶんたすかりました。その時の事をかんがへるとありがたくて涙

が落ちます。お父さんやお母さんも大そうよろこんでお名まへのわかつた所へはお禮の手紙を出しました。私はこのいたゞいた本や紙で勉強してご恩がへしをいたします。

大震災の日

下谷區 黒門尋常小學校

第三學年男

中村 進

學校からかへつてもう御ひるだからごはんをたべようと思つておかずをにてゐると急に、

ガタ／＼グラ／＼

と大地震が來ました、おどろいて姉さんと一所にはしごだんを飛びおりました。庭へ出て見ると家の人がみなでてゐました。

安心してそこに立つてゐるとおぢさんがこんな所にゐるとゆり返の時であぶないから安全な所へ行かう。とおのしやるので、皆あぶない所へ行きました。

少したつと外で、

『火事だ火事だ』

とさげびます、ぼくはこわくなつてお父さんに、

『火事はどこ』とたづねると、

『今見て來て上げよう』

といつて出かけていらつしやいました、しばらくしてお父さんがかへつてゐらつしやいました。

『火事は藏前だから、大丈夫だ』

とおつしやいました、又少したつと、

『竹町が火事だ、竹町が火事だ』

といふ聲がしたので、ぼくはお父さんに、

『ひなんをしなくて大丈夫』

ときくと、「大丈夫さ、」

とおつしやる、そんな事をいつてゐる内に夜になりました、火はいよく／＼さかんになつてきましたお父さんは、

『火の手が近くなつたから、上野の山へひなんをしろ』
とおつしやいますから、重用品をもつてお母さんとお姉さんとぼくと三人で上野の山へ行きました。

普通の日なら十分位で行けるのですが、此の時は一時間以上もかゝつてやつと行けました。

上野の山はもう人や荷物で一ぱいでした。

すわる場所も有りませんから立つてゐたらすぐそのそばにゐた女の人がふとんをひろげて、

『こゝをおねなれ』

といつて下さいました。ぼくはほんとうにうれしう御さいました。

その晩はぐつすりやすみました。

朝になるとその人にお禮をいつてわかれしました。

ぼくはつくづく親切な人もあるものだと思ひました。

地震と火事

下谷區 黒門尋常小學校

第三學年女

石井佳子

一、大地震
私は學校から歸つて、じゅばん一枚になつてすずんでゐました。まもなく「ぐらぐら」と家をゆすつてまゐりました、始めは風かと思つてゐましたら、だんだん強くゆすつて來ました。

『あゝ地震だ』

と思つて居る内に「こつちへお出で」といふお父さんのお聲がしました。私たちはいそいで佛だんの前に行きました、同時に藏の石が表と裏へくづれ落ちました。お母さんが大聲で、

『石藏の屋根が落ちた』

とさけびました。私はあまりおそろしいので日蓮様の御かけじをもつて小さくなつてゐました、いくどもくもゆれかへしがありました、お父さんが、

下谷區

三〇三

『大地震の後には必ず大火事がおこる』

とおつしやつてゐるうちに、もう、

『火事だ、火事だ』

といふ聲がきこえて來ます、こはく乍ら外へ出て見ると、丸の内あたりがさかんにもえてゐます。

太陽の色がまつかですごい色をしてゐます。

私は大地震の時は太陽の色までかはるかと思ひました。

近所の人はそれく戸をしめて逃げて行きます。

私もお母さんや、お姉さんや、弟と單物一枚づつと學校の荷物とをかへて手ぬぐ

ひをかぶつて、おしりをはしよつて上野へ逃げました。

その様子をもし先生がごらんになつたら、お笑になつたでせうが、その時は一生けんめいでした。

上野の清水堂の所へ來るとどこを見ても人と荷物で一ぱいです。時々病人や、やけどをした人がまわります。まるで戦場の様です。とうとう上野で一夜を明しました、お父さんは一生けんめいで質物を出しましたが、運悪く家も共にやけてしまひました。

何といふ恐ろしい事です。せう思ひだしても残念でなりません、私は生れて初めてこんな恐ろしい目に會ひました。

大シンサイノオ話

下谷區 山伏町尋常小學校

第三學年男

荒井貢次郎

私が學校カラカヘツテ來テゴハンヲタベヨウトスルトゴトツト音ガスルトマモナク内ノ柱ガグラグラトウゴキダシマシタ。

私ハハシトチャワントヲハフリダシテ外ヘ出テネンブツヲトナヘテキマストマモナクデシンモヤンダコロ向フヲ見マスト火ハモウホンジョフキンニモヘテキテ今ケムリハムクムクトアガツテキマス。又ベツノ方ヲミマストオテントウサマガマツカニナツテキマス。ソノウチニ火ハカツバ橋マデキテキマシタ。

オトウサンハニモツヲシヨツテ上野高等女學校ニトハコビマシタ。ソコモヤケサウニナツタカラ上野ノ山ニトニモツヲハコビマシタ。モウ焼ケテシマツタカラ山カラ下ヘオリテ行マシタ。ソシテ三日メニ焼アトヘイツテ立チノキノ札ヲ建テテキマシタ。

ソシテ電車道ニ〇〇人が一人死ンデキマシタ。ソシテ五日メニ井ナカヘネツテキル内ニ十月五日頃焼ケアトヘキテバラツクヲ建テテスム事ニナリマシタ。又ハ山ノ内ニ

ぢしんと火事について

下谷區 山伏尋常小學校

第三學年女 加藤 春子

大正十二年九月一日學校から歸つて來て喜んで遊んで居りました。どはんをたべようとする大地しんが來ました。私はあはて外へ飛出しました。みると十二階はくづれ、こはいくとうるたへている中に三方から火事になつてしまひました。さあたいへんだ私は姉さんにつれられて上野の山へにげました。父母はのこりて荷物をかたしその中私の家はやけてしまいました。

父母には、はなれどうしたらよからうと兄弟七人で山でのじくをしました。その時はかなしうございました。それから王子へ行きました。そこで親子九人がいつしよになつて喜びました。その中かなしい月日もだん／＼すぎ東京へかへつて十一月學校へ行き先生にさつそくいもんぶくると着物をはきたました。私はたいそう喜んで

父母にみせました。父母も喜びがありがたいと一日もわすれませんでした。大正十三年になりますとまことにめでたい皇太子殿下の御けつこん式がありましたので私たちは學校で赤白のおもちをいたゞきありがたくいたゞきました。

私たちは毎日／＼早くもとのやうになるやうに、はたらいてゐます。

九月一日の地しん

下谷區 竹町尋常小學校

第三學年男 片田良太郎

僕は學校へ行つて二階にいつて遊んでゐるとがたつとすこしゆれて來たので、地しんだと思つてあわてはしごだんをかけ下りました。後から妹が泣いてかけて下りました。

お父さんは柱へつかまつてゐて地しんが少しやんでから電車道へととび出しました。そしてすつかり止むとこんど火事が四方八方におこりました。すると親類のおぢいさんが來てこんど立花やしきへ皆荷物はこんでひとへ物のきがへだけもつて西巢鴨町まで行く／＼と歩いてにげました。今度西巢鴨町へ行くと〇〇人が火つけをすると

云ふので又一ばん外へひなんしました。西奥東海へ行く。○大坂火のつぎに
それで一ヶ月ぐらひひなんしてゐて今では家がたつて毎日學校へ通つてゐます。大坂
大ぢしん

下谷區 竹町尋常小學校

第三學年女 神沼時代

九月一日は學校からかへつてきてごはんをいたゞいてゐるときゆうにがたりくと
ゆれ出しました。

私ははだして表へ出て見ますと家の前が二尺ぐらひわれてゐました、前の電信柱が
やねへたほれてゐました、むかふを見るとまつ黒な煙がもや／＼上つてゐます、それ
と同時におはちをかへたり赤坊をおぶつたりした人がぞろ／＼通りました、家の前
には火のこがびら／＼とんできました。私はあんまりこわいからお母さんと妹でしん
るゐに上げていきました、そのばんは東京の空はまつ赤にもへあがつてゐました、私
はまつかな空をみつめてはないてゐました。二日は東の方や西の方から夜でも晝でも
まつ黒な煙がもえ上つてゐました、お米はたべた事もないげん米ばかりいたゞきました

たりねるのにも草村へねたりしてずゐんつらゐ思ひをしました三日と云ふものはあ
とうさんのかほをみないでももりばかりしてゐました。

その内にしんるゐの家の前をかりました、がトラックが出來たのでこちらへ來て見る
と焼あとで元の東京とは思はれませんでした。

上野へひなんしたこと

下谷區 臺東尋常小學校

第三學年男 永田三省

私は九月一日に、學校から歸つて來てごはんをたべようとすると、がた／＼ゆれて
きました。あゝ地震だ／＼と云ふ内にかべがおちたり茶だんすがたほれたりました、私はい
そいで電車道へ出てしまひました、しばらくたつと地しんがやんでしまひました、私
は電車道の向ふがはに行きました、夜になると弟は向ふの方が火事になるのにねてし
まひます、私はその時のんきなものだと思ひましたそのとき又ゆり返しが來たのでお
どろきました。

私はなんみやうほうれんげきよと何回も云ひました、其の内にだん／＼火事が近く
なりました。そこへじゆんさが来て上野へ行け／＼と云ひましたので私は上野へ行き
ました。直ぐ向ふ山に火が燃え上り、火の音もあつたので、火の音もあつたので、
私は上野の山で空を見ると空があかくなつてゐるので、おどろきました。二日のばん
になると又そこもやけさうになつたので、こんどは尾久へにげました。三日のばん
尾久の家でしばらく御やつかいになつてそれから入谷へばらつくをたてました、私
は之でやつと安心しました。

九月一日のこと

下谷區 臺東尋常小學校

第三學年女 古川 喜美

大正十三年九月一日はおそろしい目にあひました、私はその時には丁度學校から歸
つて来て、御はんをたべようとするとあのおそろしい大地しんでした。その時むちゆうで家内中ざしきのすみにかたまりました。それから地震が少しやん
できがついて見るとたなの物は落ち家の中はめちやめちやになり、近所の家のたほれ

たのもあり、瓦が落ちてけがをした人、家やかきねの下敷になつた人もあり、大へん
なさわぎになりました。その中に火事がおこりました。おどろいてゐる内に四方八方
に火の手があがりました。見てゐる内にだん／＼火がさかんになりました。もう家には
はゐられなくなつて母や弟や妹と上野の山に行きました。山にはひなんしてゐる人がたくさんおました。火はだん／＼はげしくなつて三日の
夜までもえつづいて、東京中はいいてい灰となつてしまひました。それで上野の山は
家を焼かれた人や荷物で身うごきも出来ませんでした。

やけた所へはけがをした人や川や堀に入つて死んだ人、焼け死んだ人、親子はなれ
／＼になつて泣きさげぶやらでほんとうにあはれな事です。

うちのばらつく

下谷區 龍泉尋常小學校

第三學年男 矢 貝 勇

うちのばらつくは出来ました。ばらつくは寒いからてんじやうをつけたのでちつとは
寒くなくなりました。板のすきから風がはいつて寒いのでかべ紙をはつたからすこし

あたたかになりました。疊はあくが七疊で内の兄さんのゐる所は三疊です皆んなで十疊です。今まではべんりがわらで雨がふるともりますからとたん屋さんに、とたんをはつてもらひました、又寒いからしやうじを八まいはめましたから、たいへんにあつたかになりました。それからこたつをつくつたので、なほあたたかになりました、庭の色々な花はやけたので庭はさびしくなりました、この間兄さんがきれいな花を買つて來ました。内のよこちやうの方にまどがあります、そこへ日がぱつとあたりますから僕はその花をそのままの所へだしてやりましたら花はずん／＼大きくなりました。

地震のあと

九月一日のあの大地震がすんでまもなく、火事になりましたから、お父さんやお母さんに連れられて上野へにげました、兩大師わきから竹の臺へ行きましたから又上野へ火がついたと言ひましたから、又そこを引き上げ、かんゑい寺と言ふ坂までにげてそこで二晩野じくしました、〇〇人さわぎでこわくて／＼なりませんでした、四日の

下谷區 龍泉尋常小學校
第三學年女 清水清子

午後の上野から下へおりましたら、やけない家がたくさんありましたので、うらやましく思ひました、それからものやけあとへ歸つて來ましたら私の大事のものを着物か灰になつてゐるのを見ましたら、なみだがこぼれました、それから森屋さんと一つじよになつて、ばらつくを立ててもらいました、伯父さんやお父さんが一生けんめいにあきないをして下さいました、バラツクはまだほんとうに出來ていなかつたので雨がもるのにはこまりました、今ではお店もひろげて一生けんめいではたらいしてゐます、おかげ様でぼつ／＼賣れるので私たちの小使だけはこまりません、お父さんお母さんは小供も皆ぶじでよかつたと言ふてゐらつしやいます。

大地震の時

楽しい夏の休みも終つて、まちにまつた學校へいつて久しぶりで権名先生のお話をきいてかへつて來た。土三人の友だちとにかいであるところちやうど十二時頃急にみじ／＼といひ出した。『ああぢしん／＼』といふ中に僕のだいすきな學校がつぶれ

下谷區 第三學年男

三二三

た。五六間先ではおばさんとあかんぼが死んだので大さわぎをしてゐた。あまりこわいのでおはちとうめぼしのはいつたかめとやかんとをもつてみんなで上野の山に逃げた。道を通る人人があんまりくるしそうだからにげる時お父さんが大きなばけつに水を入れて外へだした。通る人々はおいしさうにがぶがぶとのんで行つた。しばらくしてお父さんがにもつをとりに家へ歸つた。その時はもう僕の家はやけてゐたさうだ。僕の學校のどろぐがやけてしまつたと思ふとなみだがでた(九月一日)

僕の姉さんが一日の朝神田の學校へ行つたまゝみつからなかつたので板に名まへを書いて『きぬちやん』とよんでさがしあるいた。その日もとうとうみつからなかつた。二日のひるごろおそろしいたつまきがあつてかさかたかくくるとまひ上つた。僕はあまりこわいのでぞつとした。夜になつてとうとう山に火がついたと大ぜいがさはぎ出した。その中にけむくなつてきて人はにげるやらにもつはこはれるやら子供がなくやらそれはそれはいへんだつた。僕の内でも少しのにもつさいさくらの木にはへつけて水だけもつてなまへをよびく田ばたの方へにげた。せんろの上にその夜はねた。(九月二日)

朝早くたばたのよそのうちでごはんをたいておにぎりをもらつてたべた時はほんとうにおいしかつた。あまりあついで汽車の二等しつにはいつた。するとわるものが二人も汽車の中へきたそのあとをえきの人がぼうをもつて大ぜいでおつかけてきた。おそろしくなつたので學校へにげた。夜はわるものとぢしんのためにこわくてねることもできなかつた。その日もねえさんはとうとうみつからなかつた。なんてこわいぢしんと火じだらう。(九月三日)

ぢしんの事

下谷區 大正尋常小學校

第三學年女

佐々木 八重子

私がお友だちとあはせ人形をしてゐますと家がぐら／＼とうござだしました。おどろいて皆でにかいへあがりました。そしてお母様にまはりをつたへたのでかこつてもらつてゐますと又大きなぢしんがきました。どうしやうかと思ひました。おとなりのつぶれた屋根の上へ上りましたら十二かいの火が見えたのでお母様におぶさつて上野へにげました。とちうでよそのおばあさんに水をもらつたので大そううれしゆうござ

いました。それから山へ上つて家の方を見ますともう私の家のすぐそばまでまつかになつてゐました。私の家ももうやけると思ふとずいぶんくやしうございました。その夜になつて大竹先生にたすけられて田端へ行きました。そこでやつとたべ物をいたゞきました。がげんまいのむすびでたべられませんでしたのでお母様のもつてゐたばんで二日ゐましたがもうばんがなくなつてしまひました。三日目にお父様がお前はこのおむすびをたべないとしんでしまふといひました時にはかなしくてなみだがでました。お父様もなみだをこぼしてゐました。お母様もないてゐました。その夜おとなりで白いおむすびをいただいた時のうれしさはいまだにわすれられません。四日の日にすがもからむかひにきましたので行きましました。

上野の山

下谷區 萬年尋常小學校

第三學年男

山口正稔

上野の山の博物館はあの大震災の爲に見るものがこわれたといつて今見せてくれませんが動物園は見せてくれます。いまは猿や熊や虎やししやその外色々な鳥が元氣よ

くゐます、今上野の山はにぎやかであります、そうしてあの震災の爲に家の出來ない人にバラックを造つていれてくれます、そうしてこまる子供にはちやつを食べさせたり赤坊のこまるのには牛乳をやつたりしてゐます。それから子供の爲に西本願寺で學校をたてて教へてくれます。

東本願寺では幼稚園をたてました。それで土曜の日にはお話のあもしろいのをおしへて下さいます、自治會館では活動寫眞を見せてくれます、それから池のはたにはお湯屋があります、私の家は上野の竹の臺のバラックであります、夜上野の見晴しから下町の方を見るとバラックの電氣の光りです、いぶんきれいであります、淺草の十二階はなくなつたけれど五重塔が見えます。

震災後

下谷區 萬年尋常小學校

第三學年女

遠藤美津子

私はこのごろ九月一日のやうな大きな地震がなくてうれしうございます、がバラックは寒くてこまりますかながへるとあてやけてつまらないと思ひます。がこれもしか

たないとおきらめます、そこで私はかうかんがへました、やける前には一日三錢づつお小遣をつかひました、がやけてからはそのお錢をためて着物や自分のいりやうなものを買ふことにきめましたお母さんはお金は天から降て来るのではないから一しやうけんめい働らいてためなければならぬとおつしやいますそれで今私は毎日お錢をためてたくさんたまるのを楽しみにしています。

今年のお正月

浅草區 待乳山尋常小學校

第三學年男

吉田 民二

朝おきてかほをあらつておぞうに食べて學校へ行つて来て見ると大ぜい来て居たそれからはじまつてお話があつて年のはじめをうたつて家へかへりました。おわしをもらつて友だちと浅草へ行つてかつどうへはいつてかへりにかつた。うちへかへつて本を見るとまん中ごろにすぐろくがは入つてゐた。ひろげて見るとねづみの國見物すぐろくでした。夜になつてからお友だちとすぐろくをした。僕は二番と一番をとつた、次にかつたをしたらこんどはびりと二番をとつた、それをよ

私の家

浅草區 待乳山尋常小學校

第三學年女

木村 松枝

してねたのは八時頃だつた、ぼくはお正月は大好きです。私の家は吉原どて下にあります、もとはもう少し東の方にありましたが去年の大しんさいにあつてやけてしまひました。そののちは小さな小さなばらつくにすんでゐましたが、新しい年とともに新しい家にはいりました。大へん日あたりがよくてあたなかです。みんな新しいものでそろつて大へんきもちがよろしうございます。お内もひろくおにはもひらうございます。ただおにかいのないのがさびしいのと屋根がとたんでおかしくみえるだけです。

地震

浅草區 浅草尋常小學校

第三學年男

北村 榮造

僕は九月一日家の中で本を讀んでゐました。すると、ぐらぐらと地震がゆりました。僕はおどろいてお父さんとお母さんと妹二人で、ふとんの下へにげこみました。地震はますます大きくなりました。おそろしい音をたて、となりの家がつぶれたので、店員がのこぎりを持つて、となりの人を助けにゆきました。その内に火事だ、と言つてきました。さあ大變だとお父さんは金庫の中へ大切な物をいれてゐました。その内地震がやんだので家のお寺にひなんしました。お父さんや店員はかわるがわるふとんや荷物を運びました。お寺も焼けそうになつたので又にげました。僕は足が悪いので坊さんにおぶつていたゞきました。おばあさんとお母さんと妹二人は、坊さんについでゆきました。途中ではぐれてしまひました。その時は兩がわの家が焼けてゐるのであつて仕方がありませんから、僕は坊さんとまん中を通つてにげました。日は暮れました。一晚野宿して翌日となりました。お父さんが知れませんが、家中むねをどきどきさせてしんぱいしました。三日目にやう／＼知れました。お父さんは水も飲まずに僕をさがしたさうです。僕はその時うれし涙がこぼれて、口がきけませんでして、それから尾久にしばらくありましたがやつと元の所へ歸ることができました。僕は生れてはじめてあんなこわいおそろしい日にあつたことは忘れられません。僕は

地震は大きいです。おそろしい音をたて、となりの家がつぶれたので、店員がのこぎりを持つて、となりの人を助けにゆきました。その内に火事だ、と言つてきました。さあ大變だとお父さんは金庫の中へ大切な物をいれてゐました。その内地震がやんだので家のお寺にひなんしました。お父さんや店員はかわるがわるふとんや荷物を運びました。お寺も焼けそうになつたので又にげました。僕は足が悪いので坊さんにおぶつていたゞきました。おばあさんとお母さんと妹二人は、坊さんについでゆきました。途中ではぐれてしまひました。その時は兩がわの家が焼けてゐるのであつて仕方がありませんから、僕は坊さんとまん中を通つてにげました。日は暮れました。一晚野宿して翌日となりました。お父さんが知れませんが、家中むねをどきどきさせてしんぱいしました。三日目にやう／＼知れました。お父さんは水も飲まずに僕をさがしたさうです。僕はその時うれし涙がこぼれて、口がきけませんでして、それから尾久にしばらくありましたがやつと元の所へ歸ることができました。僕は

震災

浅草區 浅草尋常小學校

第三學年女

田 沼 正 江

強い風が吹く毎に、強い雨が降る毎に、先のお家の事を思ひ出して「あの大地震がなかつたら」といつも思ひます。そして今でもあのおそろしかつた事を忘れることが出来ません。

あの二度目の大ゆれでお蔵のひさしが、私達の居た八疊のらりかへドットと落ちたので、その時私はもうこわくて、口もきけず、お母さんに飛びつきました。お母さんはしつかり弟と私をだいてゐて下さいました。女中はまつさをになつて「あれあれどういたしませう」といつてふるへてゐました。

地震がすむとあのおそろしい火事、私達はむちうで上野へにげました。何でも大と荷物でたいへんでした。そしてまのかな火があつちにもこつちにも見えませんでした。上野もだめだ」といふので日暮里へにげ、又大塚へにげてやつと安心しました。それから

四目目にやけあとへ来ました。近所は焼野原で、たゞ観音様のお
 蔵も何も残つておらず、皆灰になつてゐました。屋根だけがよく見えました。『もうお内はないのだ』と思つてほんとに悲しうござ
 いました。
 それでも私の家では誰もけがもせず、今は元の所へ家を建てて皆丈夫に暮してをり
 ますから、ほんとに幸だと思ひます。
 それですから私はよく勉強して、りつぱなく東京市が早く出来るやうに、えらい
 人にならうと思つてゐます。

今年のお正月

浅草區 精華尋常小學校
 第三學年男 園部善一

震災にみなやけてしまつた僕の家はお正月をむかへても門松を立てません。僕もい
 つものやうな大きなたこを買つていただくことが出来ないで今年はずまらないお正
 月でした。いつも家でおもちをついたのでしたが、それも出来ないで今年はおな

からおもちを送つて貰ひました。去年のお正月はおもちへあんこをつけてたべました
 が今年はおんこはなくてきなことおしようゆだけでたべました。おそなへも小さいの
 一つで家の中はほんとうにさびしうございました。

九月一日の記

浅草區 精華尋常小學校
 第三學年女 荻野フミ

長い／＼夏休もをはつて九月一日には元氣よく行きました。校長先生からお話をき
 いて来ました。そしてごはんをたべてゐるとなんだか家がゆらくゆれてきました。
 「あつちんだ」といふので私はたんのそばへ身をちぢめて居りました。おしんは後
 から後から來ます。どうなるかと思つてゐると今度は火事だと言ふ人のこゑがします。
 お母さんにもつをこしらへてゐます。私もねえさんも學校のお道具をかばんの中に
 入れて持ちました。そこへお父さんがおかへりになりましたから四人はぬれてぬぐひ
 を頭にかぶりました。私共はどこへにげようかと思つてうろ／＼してゐるとそこへお
 まはりさんが通つたのでお母さんがどこへにげたらよいでせうときくと、こゝらで

は上野の山よりほかににはにげる所がないと言ひました。それから私もねえさんもおなじにかばんをかけました。おとうさんもお母さんもおにもつをお持ちになりました。それから四人は上野をさしてにげました。電車通へきて休んでゐると火のこは雨のやうにふきかゝつて來てもうあつてあつてたまりません。四人は二たびにげはじめました。上野停車場へついたのは夕方でした。少し休んで上野の山へのぼりはじめました。上つて見ると山は足のふみどころがないくらゐでした。それでもやうやくあいてゐた所へにを下しました。私はかばんをさげてゐるのでかたがいたくていたくてたまりません。それからにもつの上へねましたかねむれるどころではありません。ちやちんをさげてまいごにした人を、よび歩くこゑがたえません。私は水がのみたくてのみたくてたまりませんが誰もましてくれません。そこへ男の人がびんをさげて通りかゝつたのでお母さんのまして下さるやうにたのんで下さいといふとお母さんは、その人にたのんで少しばかり私とねえさんにのましてくれました。すると山もあぶないと言ふので四人は夜が明けるとか明けないうちに山を下りてたばたへにげました。そしておにぎりをたべて休んでゐると〇〇人が來たといふのでたばたから少しはなれた廣いはらつばへにげました。すると〇〇人のつぼりの音がどんど

んとときこえて來ます。私はこはくてたまりません。それからまだたつたばかりのお湯屋へ行きました。夜が明けると、〇〇人が又來たと言ふのではんしやうが鳴りだしました。すると男の人たちが大ぜい手に手にぼうをもつて〇〇人をおつて行きます。それから私共は四人ともにつぼりから汽車へのつて田舎へ行きました。こんなこはい事はいつしやうわすれられません。人

ふつこうきぶん

浅草區 柳北尋常小學校
第三學年男 澁谷 一雄

ぼくはこの前の日曜に上野の山へ行つて下を見ると目に見えるだけみな家ばかりだ。いつのまにこうなつたかと、びつくりした。すぐ下の大どほりを商人がいそがしさうに、じてん車で方々をかけまはつてゐる。こうばのえんとつもいそがしさうに黒けむりをむくく〜とだしてゐる。お日様までが毎日毎日お天氣で晴晴したふつこうきぶんだ。

ゆりちやんゆりちやんと誰かがよんでゐるので目をさますと、お母さんと、ねえさんがゆりちやんのおねぼうさんと言つて笑つて居ります。お日様はこんな寒い日でもキラ／＼とトタン屋根のバラックをてらして居ります。

時計を見るともう九時です、日曜日だと思つておねぼうをしてしまひました、朝ごはんがすんでちよつと御本を見て外へ遊びに行きました。あの去年の震災前にはやりだした日月ボールをあちらでもこちらでもしてゐます、私も少しばかりしてつまらなくなつたので家へ歸つて二階へ上つて見ると、まあどうでせう。

今日はお天氣がよくて空が青々とすむで居るので浅草の観音様のお屋根も五重の塔も兩國のこくぎくわんもよく見えます。

上野の山も緑色にちやうど繪の様です。

何んだか観音様の方へ行きたくなつたので、お母さんに連れていつてとおねだりすると、こんなに地震ばかりあるのに行くとおぶないから、もう少したつて櫻の咲く頃に行きませうと申されましたので、それを楽しみにしてあの上野の山が赤く美しくなるのを待ちませう。

僕の家

浅草區 富士尋常小學校

第三學年男

高 椋

満 (十一歳)

僕の家の人數は皆で七人居ます。お父さんとお母さんとおばあさんと僕と僕の妹が二人に弟が一人です。僕の家は菓子屋です。本店と支店があつて内は支店です。お父さんは大ていのは本店にゐます。お母さんやおばあさんは内にゐます。

妹はことし八つになるのと、四つになるのとであります。弟は去年の大地しんの後に生れましたからまだあかんぼです。僕のちぢいさんは僕がまだ學校へあがらないさきに死なれました。

僕はたまに活動に行きます。僕の家はあの九月一日の大地しんからこつち廣くなりました。それは内のとりの家の人がゐなかに行つて東京に來ないことになりましたから、となりと一しよにして家を立てたからです。それで二階がなくても廣いくらゐです。僕の家はバラックですけれども、公園のバラックにゐるよりもよい心もちがいたします。

九月一日の地震

浅草區 富士尋常小學校 第三學年女 横山 末子 (十一歳)

九月の地震の時、私はお晝で御飯を食べておました。その時今考へても恐ろしい地震がきました。私はお母さんとにげましたが、ふと気がついて、大正琴があつこつてゐたので、急いで又家へ行きました。二度目にいつた時はもう家は火でかこまれておりました。私はそれで大正琴を持つてにげましたが、あつくてたまりませんのでたうくはなしてしまひました。

一私が朝焼野原へかへつてきた時、大正琴はほねばかりでした。私はその時泣きさうになりました。そして焼野原に立つてゐました。さうするとかや屋のおばさんが、病氣でゐたので、小ざうがおばさんの手をもつてあるいてゐました。おばさんは泣いてゐました。

「おかみさんずねぶんひどいですねえ」と言つてゐました。けれども皆ぶじでした。

本所のあたし

浅草區 富士尋常小學校

第三學年女 小早川 登久子 (十一歳)

おみせのおくらも

たふれたよ

田町のおくらも

やけちやつた

本所のあたしは

やけだされ

あうちはないし

どこいから

テントの教室

浅草區 新堀尋常小學校

第三學年男 保坂 秀男

飯田先生が「明日からテントでおけいこすると」とおのしやいましたので小さな机を持つてならんだ。

そこへ鈴木先生がお出になつて僕らをテントの内へつれていつてくださった。

はいつたところが赤くて火事のやう。下を見たらアンペラの上へ毛布がしいてあつてなかなかつかうなものだつた。まわりはずつと布でこしらへてある。黒板もある又黒板ふきもある。なかなか習ひよい所だつた。小さな机がならんでまるで上野の山から東京を見たやうだつた。まん中に太い柱がたつてゐる。上は明るくてをかしいと思つたらあかりさしになつてゐた。

先生が「今日からこのテントの中でべんきやうする」とおつしやいました。外へ出たら目がへんになつた。僕はブラックの教室よりテントの方がよいと思つた。

まんと

浅草區 新堀尋常小學校 八下 (十一)

第三學年女 福島 あい子

私は九月一日の大しんさいで着る着物も皆焼いてしまひました。暖い中はどうか

にあひましたが寒くなつて學校へ行く時、寒い風に吹かれて行くのはさぞこまるだらうといふので、大阪の人たちが私たちに一月十六日に、りつばなまんとをおくつて下さいました。お教室で先生が皆んなにくれた時は、とび立つ程うれしうございました。着るたびにありがたひかんじが心へうかんできます。これがあるので寒い雨の降つた日や雪の降つた日もこまらず學校へ行つてべんきやうが出来ます。私たちは御おんがへしとして學問をよくして、えらい人になつて、のちにかういふさいなんにあつた人があつたら、何かあげて御おんをかへさうと思ひます。

ちしんと火事

浅草區 福井尋常小學校

第三學年男

森 山 茂

がらがらと大ぢしん

みんなは青くなつてゐた

今度は火事だ大へんだ

早くにげやうどこまでも

浅草區 第三

三三三

上野や日暮里たばたまで

わら小屋ばらつくとたん小屋

あゝかなしいな大ぢしん

馬あそび

みんなで馬であそんだら

清水の友ちやんあしたので

大ぢしん

浅草区 福井尋常小學校

第三學年女

柳川きぬ子

九月一日、學校からかへつてすこし表にあそんでゐると、あのぢしんにあひまし

た。あかあさんはあはてて私をさがしにきました。ふたりで八まん様へにげていきま
した。おとうさんはさつきごようたしにいつてまだかへつていらつしやいませんで
しんばいしてゐたところへとんできました。八まん様はもう一ばいの人でした。その
うち工業學校から火事が出て、たちまち福井町の方へもえてきました。八まん様にも
ゐられせんからおとう様はぢしんが度々来てあぶない中を二三度家の中へはいつて
すこし荷物を出しました。私はバスケットとてつびんをもちました。おとうさんおか
あさんは、ふるしきづゝみをしよつて上野へにげました。上野でやつとあんしんしま
した。きのふからすこしもたべものをいたゞきませんでおなかがすいてたまりませ
んからおとうさんが、ほうほうへいつてたべものをさがしてきましたけれども、私は
火事がこわくてたべられませんでした。そのうち大ぜいの人がどん／＼にげていきま
すからどうしたことかと思つてゐたら又上野の山へ火がついたので、おどろいて又そ
こをにげだしました。それからすまもの原にねてゐますとよる十二時頃雨がふつてき
ましたので、どうしたらよいかとてまつてゐましたらとなりねてゐた人が私のうち
におとまりなさいとしんせつに云つてくたさいましたので、よろこんでとめていただ
きました。そのうちはたまのきの大きな三がいのうちでした。あくる朝ごしゆじんに

あつくおれいをいつておとうさんののでしたきの川へいきました。むこうのうちでもたいさうしんせつにしてくれました。それから二三日たつて家のやけあとを見にきました。するとあさくさばしの川にやけしんだ人がたくさんういてゐた。あかんぼや、七つぐらいのをとこの子もしんでゐました。私はそれをみてほんとうにかはいさうに思ひました。九日めに東京にゐても學校にゆくこともできずどうすることもできないのでれいがんじまからじやうきにのつて伊豆へかへりゐなかの學校へあがりました。先生もきのどくだといつてかわいがつて下さいました。又ともだちもなかよくして下さいましたのでほんとうにうれしいと思ひました。

私達の學校

浅草區 松葉尋常小學校

第三學年男

小林芳之

私達の學校は、九月一日の火事で焼けてしまひました。今はそまつなばらつくの學校です。

天井もなければかべもありません。机はありますが下はあんぺらです。二階はあり

ません。下駄箱は板を釘でうつてあるだけです。

こくばんも小さいのが三つあります。

ぼろしは板に釘をうつてそれにかけておきます。

屋根は便利がはらです。

冬は火ばちを置きます。

教室のくらしい時には電燈をつけます。

學校はばらつくですから、天氣のよい日は、すきまや、ふし穴から日の光が入ります。

大地しん

浅草區 松葉尋常小學校

第三學年女

坪井キク

大正十二年九月一日、長い間の夏休がすんで、喜んで學校に來ました。歸つてからお晝のごはんをいただからとすると、あの大地しんでした。

もう家はつぶれてしまふかと思ひました。父が居りませんので、母と二人きりでし

たからずぬぶんしんぱいをしました。父も母も皆喜びました。そのうちに又火事があぶないから、父母に手をひかれてやつとの事で上野の山へにげました。

これで安心と思つてゐましたら、そのうちにこの山もあぶないと言ふので、泣いて居りました。

けむくてたまらないので、着物をかぶせてもらつたり、火の子をおつてもらつて、父母にたすけてもらひました。

山にゐて水はのみたくても水はなし、たべるものはなし、三日のまづくはずにゐました。これではしようがないといふので府下へ行きました。

大震災

浅草區 千束尋常小學校

第三學年男 西山 勇 吉

を九月一日の學校からかへつてきてすぐに光崎さんの家へあそびにゆきました。じて

んしやにのつてあそんでゐましたが、きうにづががきなくなつたので、にかいのものほしでかいてゐると、きうにぐらくとゆれるので、おしんだといつてたんすの前へ来て見ると、いまにもたふれさうだつた。光崎さんはいつしやうけんめいに「よなをしよなをし」といつてゐましたから、私もまねをして「よなをしよなをし」といつた。だんだん地震はつよくなつた。下ではがたんばたんといふ音がした。

たぶんたんすがたふれたのだらうと思つてゐました。じしんがやんだのではしごをよろけながらありて、はだしのまゝ石屋へむちうでにげました。うちへかへらうと思つてうちの方を見ると、けむりがもうくとあがつていかれない。向島へゆかうと思つて光崎さんを見たら光崎さんはゐない。あちらこちらとさがしたがみつからなかつた。しかたがないから一りで向島へゆかうとけつしんした。

大通へ出てみると人が一ぱいでゆかれません。人をあしわけてやらうとあづま橋の前までくると、あづま橋がいまにもあちさうなので上野にゆくことにした。人がいつばいなので車のあとをゆくとちうがらすをふんでちが出たがその時はむちうでいたくも思はなかつた。さういふ時やつと一あん心したが、あかあさんのことがしんぱいでたまら

ない。その中日がくれてしまった。夜中じぶんはひなんみんで一ぱいだつたが、知り人にもあはず、その晩はひとりであるいてくらしてしまつた。そのよく朝あかさんをさがしてゐると石坂さんのおばさんにあつた。

前まもなく石坂さんのおじさんが、あかささんにおばさんをつれてきてくれたので、その時はうれしくて涙がこぼれました。そしてごはんをいたゞきました。その時のうまさといつたらじつにいひやうはありませんでした。

そのあくる日小石川の家へ行つて、一日からのことをはなしましたら、にもつはださなくともいのちさへあればけつこうだといつて、よろこんで下さいました。とうぶんこの家におせわになることにきまりました。

思はれてならない筆入

浅草區 千束尋常小學校

第三學年女 鶴田 宣子

悪いぢいんのために私のすきなようふくやいろいろな物がやけてしまひました。その中でも思ひ出すのは革の筆入です。今でも目をつぶればありありとうかんできます。

その筆入は姉さんと兄さんとおそろひで白木でかつたのです。私の友だちの鎌田さんも、同じのをもつています。鎌田さんの筆入はやけませんでした。私はその筆入を見ると、うらやましくてなりませぬ。又買ひたいと思つていますが、このさい革の筆入でなければいけないの、木ではいけないなんて言ふ時ぢやないからしばらくがまんしてをります。修身でけんやくといふことをならいましたから、あきらめてをるのです。それでも夜などは、その筆入のことを思ひ出します。いくら筆入れのことを忘れてしまはうと思つてもわすれられません。今度又あんなにいたづら者のぢいん太郎とかじ子があばれたら、おさうをしてやりませぬ。ほんとうにしゃくにさわつて、しゃくにさわつてたまりません。あきらめのつかないあの筆入……十年たつても二十年たつても、あのいたづらなぢいん太郎とかじ子のいたづら兄弟は大きらひです……思はれてならない筆入……

九月一日の大地震火災

浅草區 石濱尋常小學校

第三學年男 川瀬 勇

長い夏休みもをはつて、やう／＼九月一日になつた。僕は喜び勇んで、歩みもかろく學校へ來た。雨がたくさん降つてゐた。長らく別れてゐた友達と語り合ひ、先生のお話を聞いて、學校から歸つた。お晝のごはんを食べてから、少し食休みをしてゐるとあのぢしんであつた。

「おやおしんだ」と思ふと次に來たのがあまりゆれたので、どうしたのかさつぱり分らなかつた。「ドカンガラガラッ」後は何も分らなかつた。後で氣がついてみたら、家がつぶれた。いつも高いと思つた天井や柱にかゝつてゐた鏡などが、僕の頭の上に來てゐた。うれしいことには僕のからだの上には、板一枚のつてゐなかつた。僕はどうしたらばよいだらうと思つてゐると、誰か屋根をやぶつて入つて來た。こわ／＼ながら見たら、それはお父さんであつた。やう／＼出してもらつた。

「みんなゐるか誰もぶじか」お父さんはどなつてさがしてみたら、兄さんが一人ゐませんでした。もうきつと死んだらうと思つて、お父さんはがつかりしたやうなやうすでした。お母さんは「オイオイ」泣き出した。

僕たちは一しよに寶元寺へにげました。とちゆうでずるぶん火にをはれた。お父さ

んはあるけなくなつた。家がつぶれたときに瓦がぶつつかつたのだと分つた。ほつと安心すると「つなみだ」と言つてさわぐ者があつた。海の水がだん／＼上つてきて、いきも出來ないのではないのかとしんばいした。二日の朝家をかちてそこでねたらそのばん、大きなぢしんがあつたので外へ出たら「○○人が悪いことをしに來るから氣をつける」と言ふ者があつた。

その家に二十日ばかりゐて、かりごやへいつた。かわつた自分の家を見た時には、なみだがとゞまらなかつた。こんな大震災は誰もはじめでであらう。僕はたゞ自分の家の人がけがをしなかつたことを神様に御禮を申します。

たのしい三月

浅草區 石濱尋常小學校

第三學年女 田中千代子

たのしい／＼三月が一日々々に近づいて、あた／＼かな目がつづくようになつて來るにつれて、私たちはきふるしたわたいれをぬいで、新しいあはせをきなければなりません。

三月になると先づ第一にたのしいのは、おひな様の日です。とこのまにおひな様をかざつた時の心もちには、なんともいふことのできないほど、うれしうございます。それから又この月のおしまひ頃になると、私たちのうれしい事はもう一ツあります。それはおめんじやうをいただくおしきです。一年の間一心にべんきやうしてきたおかげで、私たちは四年生となるのです。そのたのしい三月もまもなく來ます。ほんとに一日も早く三月が來るのをまつてゐます。

やけぬ前のおもちやと今のおもちや

浅草區 小島尋常小學校

第三學年男 新井忠四郎 (十一歳)

私は去年の大ぢしんの時、このキューピーを出しましたけれども上野の山へにげて行く時、道でおとしてしまひました。

このキューピーは私と仲よしでした。いつも學校からかへつてきてはキューピーを出して見てゐました。も一つはせと物でできてゐる士でしたが出すのをわすれました。この二ツをなくしたのは實にくやしい。やけあとへ行つて見ると士のくびがとれてゐ

ました。その時はずゐぶんかなしうございました。

今あるのはダルマさんと小さい羽の生えたキューピーです。この間お母さんから買つていたゞいたのです。それでやけぬ前のキューピーはおぢいさんがくれたのです。今考へて見るとかなしくなつてきます。今あのキューピーと士とあればよいと思ひます。

私はぢしんです

浅草區 小島尋常小學校

第三學年女 高野歌子 (十一歳)

私はぢしんです。九月一日のおひるごろぐら〜とゆれてやつた。人々はおどろいてまつ青になつてお家から外へとび出した。私はいくらか氣の毒になつたので少しやすんでやつた。

誰もあゝおそろしかつたと少しあん心したやうであるから、又ゆれてやつたら二度びつくりして電しん柱にしがみついた。又氣の毒になつたのもう大きくゆれるのをよして時々小さくゆれてやつたが、皆は又いつ大きなのがやつて來るかと思はいて

てんで色々な物を持つてにげ仕度をして居るので私はおかしくなつた。すると火事だと言ふ聲に誰も死んだやうな顔をして自分のすまゐをすてて、上野や田舎へにげていつた。

私のために東京がこんなになつたのかと思ふと、本とうに氣の毒でたまらないが、なまけ者にはよいかたきうちをしたやうな氣がする。

おなかへ行つたこと

浅草區 山谷堀尋常小學校

第三學年男

栗山領助

私はぢしんや火事で、おなかへ行きました。

おなかへ行つてからすぐ田んぼへ行つていなごを取つて遊びました。そして少したつてからかへつてきましたら、もう夕方でしたから、おふるにはいつてねてしまひました。翌朝起きてみるともういなごの子は起きて外をかけておました。私も起きてみるとおなかのをじさんが私の顔を見て笑つておましたから私は、「おじさんお早う」と言ひましたらおぢさんも、「おじさんお早う」と言ひましたらおぢさんも、

「お早う」と言ひました。そして御飯を食べてからおなかの子が學校へ行くと言ひました。私はあとをついていつて見るとおなかの子は見えなくなつてしまひました。あくる朝起きてたんぼへ行つて遊んでみるとおじさんがきて東京のバラツクが出来たと教へてくれました。私はその時うれしくてたまりませんでした。

ゆふべの雨

浅草區 山谷堀尋常小學校

第三學年女

瀬戸行子

ゆふべねようと思つて、ふとんをしいておびをといて、とこの中へはいろうとする。と、あられのやうな大粒の雨が、ぼつりぼつりとたん屋根にあたりました。間もなくざあ／＼とふつてきました。外へ出て見ればそれほどありません。内の屋根はとたんいたですから、少しの雨でもたくさんふつてゐるやうにきこえるのです。あんまりうるさいので、私はふとんをかぶつてゐる中にいつの間にか、ねむつてしまつてなにもしらずに楽しいゆめを見ておました。朝起きて見ると、あんまりからりとはれてゐるので、私は目をまるくしておどろきました。

王子稻荷に参詣

浅草區 田原尋常小學校

第三學年男

勝 倉 晴 雄

僕は學校から歸つて来ておとうさんといつしよに王子稻荷に参詣に行きました。田原町の停留所から電車に乗つて上野の停車場まで行きました。停車場へ着くとおとうさんがきつぷを買つていらつしやいました。丁度よくきつぷを切つてゐる所でした。切つてもらつて乗るとまもなく動き出しました。僕は窓から外を見ると、汽車のかまや客車がはなれてたくさんありました。その中に日暮里に着きました。おりの人も乗る人もたくさんありました。まもなく次の停車場につきました。そこは田端でした。この次はありますから、出口でまつてゐました。その中に汽車は王子に着きました。それから王子稻荷神社につきました。神社の入口の所へ行きますと、おとうさんが僕に「油揚げを買つていらつしやい」とおつしやいましたから、僕はかけ出して、とうふ屋にいきました。とうふ屋のおばさんが「あなたどこからおいでにたつたのですか」といひました。僕は「浅草から、おまわりに來たのです」と言ひました。「今日お

詣りをしてすぐ歸るのですか」とおばさんが言ひましたから僕は「ええ」と返事して油揚げをもらつて、おとうさんのゐらつしやる所へ來て石段を上つて手を合せて拜みました。拜んでから曲つた高い石段を上つて行くと奥の見えないまつくらな穴がありました。こゝにはきつねがゐると言ふことです。この前に油揚げを置いて元來た道を通つて停車場へ來ました。上野行の汽車が來ましたが今少し早ければ乗れたのですがおそかつたので次の上野行の汽車は二十分たゝなければこないので飛鳥山に上つてみました。こゝは櫻の花のじぶんには大へんに人が出てにぎやかだとおとうさんがおつしやいました。それから山をおりて本を買つてもらつて汽車に乗つて上野の停車場に着きました。今度は自動車に乗つて家に歸りました。

いつかの地震

浅草區 田原尋常小學校

第三學年女

戸 田 榮 子

いつかの地震は、ずるぶんひどくゆれました。私はその日の夕はんをたべながら、

お父様やお母様の前で「今日はすぬぶんむしあついわね。」と申しますと「さうだね、今晚でも地震があるかもしれないね。」とお父様があつしやいました。すると、お母様にだかれてゐた弟が「地震があるの、あたいはいな。」とべそをかきながら申しました。

お母様は「そんなことうそよ、ぼうやはおりこうだからねんねおし」とあつしやいました。弟は「あたいはとんの中でねんねするの」と言ひましたから、私はふとんをひいてやりました。それから私も弟のとなりでねました。

そして、あきやうとすると、ぐらくと家がゆれましたので、外へ飛び出さうとしますとお父様が「外へ出なくてもいいから、ふとんの中へもぐつてゐらつしやい」と言はれました。

私や弟は、ふとんの中へもぐつてゐました。それから間もなく外の方で「おゆやのエントツがたふれた」と云ふ通りがかりの人のこゑがきこえました。それからすぐ表へ出て方々のエントツを見ましたがどこのエントツもたふれてはゐませんでした。

僕のかばん

浅草區 金龍尋常小學校

第三學年男

荻込健次郎

長い／＼夏休がをはる十日ごろ前、僕はお父さんと、ねえさんと、三人でいなからかへつてきました。するとそこへ、入谷のおばさんがきて「まあい／＼所へかへつてきましたね」と言つて、僕とねえさんにかばんをくれました。

僕はよろこんでいる中に、おばさんはかへつてしまひました。するとお父さんもお母さんも「いいのをもらいましたね」と言つて、よろこんでゐました。

それから僕は、あくる日から、毎日早く九月一日がきてくれ、ばいと思つてゐる中に、九月一日がきましたので僕はよろこんで、學校へ行きました。

そして一時間ぐらいたつと先生と、さよならをして家へかへつてきました。そしてまもなくたつと、あの大ぢしんがゆれはじめましたので、僕は外へとび出しました。

その時僕は、かばんを出すのをわすれたのでとうとうやいてしまひました。そしてやけてから學校へいつた時には、本をふろしきにつつんで學校へかよつてゐましたが

今ではほかのゐなから、かばんをおくつてくれましたので、僕はこれをやけない前のかばんのつもりで、だいじにかをうと思つてゐます。

おきやうしつへの引こし

浅草區 金龍尋常小學校 第三學年女 細島立子

私はおきやうしつがきれいになつたことを思ふと、いゝきもちがします。私たちのせんはいつてゐたおきやうしつは、今思ふとずいぶんいやな所でした。たゞ今度のおきやうしつには、こくばんがなくてをしいと思ひますけれども、かうしてべんきやうさいでさればいゝと思ひます。私はせんつくえやくくばんのないときを思ふと、私たちは一番しあはせで、べんきやうしてゐるところをみると、私はありがたくなります。それも横山さんやまつぶしさんたちが、はたらいたためにこんなにつばなおきやうしつができたのです。先生たちやお手つだひした方が、いつしよけんめいにはたらいたおかげでこんなべんきやうができます、私はありがたいと思ひます。いつしやうけんめいにべんきやうしてこの學校をりつばな學校にしたいと思ひます。

大地震の思ひ出

浅草區 清島尋常小學校 田 並 秀雄

第三學年男 小野 秀雄

大正十二年九月一日の十二時ごろであつた。俄に震動がおり、軒はかたむきやねはくづれ、家がぞくぞくとつぶれた。

「大地震だね。」といつた時は方々からえんえんと火焰が上つてゐた。僕はこの時、外にゐたが、いそいで家に歸つた。家の者はぶじであつた。夜になると空が一面にま紅になつた。これはあぶないといふのでやつと上野の山へにげた。翌日になるとここもあぶないといふので、又もや田端の原へひなんした。ここでも大へんこわいめにあつた。その晩は谷中の知つてゐる家へとまり、四五日たつてから、王子のしんるゐへいつたので、やつと安心した。自分の家へ歸つたのは今から四ヶ月ほど前である。

焼けた東京

浅草區 清島尋常小學校

第三學年女 河上 ヨシノ

さびしいよるの

十時ごろ

そらにあつき様

ひとりきり

きれいにやけた

東京を

きいろいあめいで

みおろして

じつとひとりで

見つめてる

あーの十時

あゝかはいさうな子供たち

浅草區 玉姫尋常小學校
第三學年男 富田 近藏

にげようとしてもにげられぬ

父はしごと母もあらず

父のだいなかなも出せぬ

子供はないてそとへでる

ないてあどろく子供たち

あついなみだはほろくくと

母のだいなきものもだせぬ

なみだとともに子供もさえる

あたりいちめん火いの海

やけたはれぎ

浅草區 玉姫尋常小學校

第三學年女 若井 清子

あの地震の十日前にお母さんに着物を買っていたときました。その着物はがずでこ
うじじまでした。それを一ぺんもきしないでやいてしまひました。もしもあれがつら

にはいつてゐたならたすかつたらうと思ひますがたんすへ入れて置いたからすつかりやいでしまひました。私はよその子供がきれいな着物をきてゐるのを見ると自分にもあゝいふよい着物があつたのにと思ひます。又方々の店の前を通る時よく自分の着物にてゐるのを見ます。その時はやけたあの着物のことを思ひ出します。

地 震

本所區 牛島尋常小學校

第三學年男

澁 谷

清 (十歳)

ぼくがごほんをたべてゐると。がたん／＼と言ひながら人人がにげだしました。ぼくがねづみいらすの所にゐるとどうびしやん／＼言ふとすぐぼくの家がつぶれだしました。少しすぎがあつたからぼくとおかあさんがにげだしてはらつばにいつた。ざいもくがあるその上に人人がのつてゐるとみんなが秋葉神社へにげろ／＼と言ふので私たちも秋葉神社へにげました。ところがまたがたん／＼とゆれだしたから木へつかまりました。その中にけむが出はじめるともうよるになり、あちらでもこちらでもまつかで大きくわじになりました。

いもん袋

本所區 牛島尋常小學校

第三學年女

小澤花世子 (十歳)

九月二十四日に町會からいもん袋をいただきました。お母さんのおゆるしでひらいてみましたら、お見まひのお手紙と心をこめた日用品かずかずがはいつてをりました。お母さんにおみまひのお手紙を讀んでいただきましたら、むねがいつぱいになりました。たその時「お母さんはきつとえらい人になつて、このなさけある方に、お禮をいはなければなりません」とお話がありました、それで私はこのおなさけとお母さんのお話をわすれないで、毎日勉強してをります。

私の田舎

本所區 明德尋常小學校

第三學年男

間 原 義 資

私は焼出されて土浦のおぢいさんの所へ行つてゐました。そこは茨城縣でも開けた

所です。冬にかいたやうな筑波山がすぐ目の前に見えます。霞が浦はなんともいへないよいけしきです。私の好きな飛行機や飛行船が毎日幾臺も飛んでゐます。小學校は新しいのと古いのとあつて、古い方は三年と四年とです、お父さんは遊んでゐてはいけないと云つて學校へ入れてくれました。私は參年ですから古い方でした。その學校はかねのかはりにたいこをどん／＼と打つのです。私はお宮のたいこかと思つて、すましてゐたら「間原君はじまるよ」と言はれたのでびつくりしてならびました。所かはればいろ／＼の事があると思つておかしくなりました。町のはづれの方に驚の宮公園があります。私もそこでよく遊びました。學校の友だちも來てゐました。そこにはすぐそばにはす池がありまして、はすの實がたくさんありました。田舎ではこれを「でまなく」と言ひます。それをみんな取に行きます。よくみつげられて追かけられるとすぐ松の木へ上つてはすのみを食べます。まるでおさんのやうだと思つてふきだしたくなりました。そういふ子供は學校では丙組です。土浦の學校では甲組、乙組、丙組とあります。よく出来る者を甲組に入れます。友だちと遊んでゐても甲組だとおぼれます。私は甲組でした。

一月一日

本所區 明德尋常小學校

第三學年女

飯村よいせ

私は朝はやくおきてそとをみますとたいそうよいお天氣なのでうれしうござい
ました。おとまりの物としちやんとつしよに學校にゆきました。校長先生からいろいろのお話がありました。そのあとで米國の女のひとと小さい女の子と二人できておくわしやお人形やりぼんや
それはいろいろの物をくださいました。

私は九月一日の火事でやけてなにもありませんでしたからずいぶんうれしうござい
ましたお正月にもつてあそぶ物がないと思つてゐましたのに米國の人からいただいた
おもちゃでたのしくあそびました。

私はおれいのがみがかきたうございですが字がわかりません大きくなつてから米

國の字でおれいをだしたいと思ひます。

九月一日

本所區 中和尋常小學校

第三學年男

千野繁雄

大正十二年九月一日はあそろしい日でした。十二時二ふん前にとつぜん大ぢしんが船のごとくゆれだしました。ぼくはその時家にゐましたが、はつと思つて外へ飛びだしました。そのうちにかじが四方八方へあつて來ましたので、ぼくたちはとみかは町からにげだしました。まづようばしをこしてきよすみこうえんでしばらく休んでゐましたが、こうえんがもえはじめたのでまたにげだしました。そうして月島のあいをひばしの所へ來ますとでんしやがとまつてゐたので火をふせぐことが出來ました。その時にはもう火はききました。がおなががすいてゐるのでした。そのうちにうちのしんるゐのかめゐどの人が來ましたので、よろこんでかめゐどへ行きました。そうして二十日ほどゐましたがもうばらつくが出來てゐるのでそこへうつりました時にはもうみんなやけのの原になつてゐました。

私の命はたすかつた

本所區 中和尋常小學校

第三學年男

伊藤久榮

ゆらゆらゆらと

ゆれだした

大きい地しんは

お父さん

私たちを

いぢめよと

つゞいてくるのは

お母さん

それになねして

子供たち

ぐらくぐらりと

本所區 第三學年男

三六一

うごき出す

東京中は

大さわぎ

おしんとともに

火事になり

着のみ着のみ

かけだして

大人におされて

なきさげび

火に追れつゝ

にげまどひ

やうやくにげた

月島の

こわい一夜を

四日の日草の上

なつかし母さま

いづこにか

かわいい妹

なにしておか

はなればなれの

かなしさに

つかれた足を

ひきづつて

たづねて

来て見れば

すむ家もなし

やけのはら

三草 母 妹 弟 (十二)

今は本所の

やけあとに

ぼつ／＼／＼と

家がたち

一家無事の

うれしさに

ゆめのやうな

バラツクで

たのしい日を

おくります

教室こしらへ

本所の

本所區 本所尋常小學校

第三學年男

楓岡庄作

(十二)

四日の日先生が

「明日は本所學校へ行きます。」

と言つた。すると皆さんは、あゝ、よかつた／＼と、言つてよろこびました。明日の

朝學校へ来て見ると皆さんは机をはこんでゐました。私も五つばかりはこびました。

すこし遊ぶとこんどは先生が、

「女の人は中へ入つてござをしいてござを作りませう。男の人はレングワを拾つて來

て、上りだんを造らへて下さい。」

と言ひました。

私がレングワを拾ひに行く時おざの中を見たらほこりで先生やこずかへさんが見へ

ないくらいでした。

私がレングワを拾ふとすると糸をほしてゐた人が、

「こらそのレングワをもつて行くのはだれだ。」

と言つておこつた。

私たちは苦勞をしてこしらへました。

大喜びで上がらうと一人がレングワの上に乗るとせつかくつんだのがすつかりくづ

れてしまいました。又こしらへるとこわれてしまひました皆さんがあひるに行つた時

私ともみやまさんとでこしらへましたが、やつぱりうまく出きません。六日のおひるのやすみの時間になりつばなだんが出きました。果てはさうせの成るのふだの活すの成るの言のふまゝ。

一月十五日のじしん

本所區 本所尋常小學校

第三學年女

高橋 しん (十一歳)

私がいきもちでねてゐますとぐらつとしてきたので目をさましてしまいました。内のお母さんや、お父さんはとびおきました。私もとびおきてお父さんに、じつかりつかまりなきさうになつてしまいました。

その時は、こまつたことに、おなかの、おちいさんが、きていたので、家のお母さんは、「おちいさんしつかりしてください、しつかりして下さい」って、お母さんと幾度も言ひました。

私の家はよくたつてをりませんので、にかいからふり落とされるやうな氣がしました。やうやくぢしんがやみました。

私たちは着物をさがそうとおもひましたが、くらくてわかりません。お母さんにはさがしていただきました。それをきて、下へおりてきて、外へでて見ますと、もやがおりていたので、じぶんのゐるとたるだけかしわかりません。すこしたつてから家へはいると、まつちがみつからないので、お母さんがさがしてゐましたから私も、いつしよにさがしたので、みつかりました。この日おちいさんは、ぢしんがこわかつたと見へて、朝のごはんをいただくはずぐ歸へつて行きました。

僕たちの仲間

本所區 柳島尋常小學校

第三學年男

渡 邊 正 信

僕たちの仲間はみんなやけ出されました。四方八方へにげ出したので、今でも二百人ばかりしかありません。あとの二百人ばかりは、どこに行つてるのでせう。僕たちの先生も二人ほど、御病氣でおやめになりました。地震や火事はもうこりこ

りだと、みんながいつておます。

九月中頃、僕はお父さんやお母さんと一しよに、もとのところへバラックをたてました。九月の末頃になつて露天學校がはじまるといふので行つて見たら、二十人ばかりでした。それでも皆で僕たちの教室のあつたところや、池や木のやけあとをたづねながら、昔がたりをしました。

露天學校では、毎日おもしろいお話をきかしていただきました。かへりには何かいたくのでうれしくてたまりませんでした。露天學校は一ばんおもしろいとおもつておます。

それから仲間がだん／＼ふえて来ました。二組になり三組になつて、とう／＼糶株廠のバラック教室で勉強しました、寒くて手のゆびがきかなくなり、ブル／＼ふるへてゐたこともあります。

僕たちの仲間は、色々なものを大へんにいただきました。ありがたいとおもつておます、はかまはいただかないので、今でも、だれもはいておません。

今では學校もできました。四組ありますが、午前と午後とにわかれておます。ストーブもあり、あたたかで、けつこうだとみんながいつておます。僕たちの先生は、僕

たちに「東京市を早くりつぱにするにはどうしたらよいか」ときいたので、僕たちはよく勉強して、力をあはせてはたらけばよいと答へたら、先生は、それはよいかんがへだとほめられました。僕たちは早くりつぱになりたいとおもつておます。

中三組、汽車、地震から今まで

本所區 柳島尋常小學校、第三學年女、鴉、田、夫、田、佐

九月一日の大地震から、ずいぶんなんぎいたしました。一日のおひるから六日まで野にねて、やつと田舎へ行きました。田舎の人々は、ぶじをよろこびました。田舎の學校へ上つたら先生がやけだされの子だといつてかはいがつて下さいました。東京へ歸つて來たら、もとのきれいなみやこも、もうみんなバラックになつておました。私

はかなしくなりました。それでもお友だちがみんな元氣よく學校へかよつて居るのでうれしく思ひました。あゝおそろしかつた九月一日の地震よ。

九月一日

本所區 横川尋常小學校

第三學年男 鈴木道之助

私ハ九月一日ノ地震ノトキ、ウチノオトウサンガキナカツタノデオツカサント明トク學校ヘ火ガツイタトキ車ヘコリヲ一ツツンデニゲテ行マシタ。ニゲテ行ツタトコハ淺草ノデンボウインデアリマシタ。チャウドソノトキ花ヤシキガヤケテキマシタ、花ヤシキノ前ニ茶ミセガアリマシタ。ソノウチガ私ノウチトシツテイルノデス。ソコノウチハ本所ニモウチガアリマス。淺草ノウマ道ニ本店ガアリマス。ソノ本店ガヤケタトキハ一日夜中ノ三時ゴロデス。私ハ三日ノ日ニソコノウチノ人トジドウ車デ川口マデイキマシタラ汽車ニノレナカツタノデヨソノウチヘトメテモライマシタ。ソノ日ノ夜中三時ノ汽車ヘノツテ行キマシタ。

大正の大地しん

本所區 横川尋常小學校

第三學年女 矢部きよ子

私は九月一日におひるごはんをたべていましたら、きうに大きな地しんがやつてきました。かはらはおちる、家はつぶれる、方方大さはぎをしてゐます。私たちははくてあはてて外へにげだしました。表へ出てきんぢよのおばさんと外でみんなでかたまつてこはいくと言つてゐるうちに向の方が火事だとゆつてさはいでゐますので口もさかれなくなりました。それからきんぢよの人にもつなどは何にももたずいで水戸様へにげました。そのうちにだんだん火事がひろまつて、水戸様があぶなくなりましたから、そこをにげ出て寺島の方へひなんしてやつと助かりました。

犬のゆくへ

本所區 江東尋常小學校

第三學年男 鈴木泰太郎

ぼくは去年みんなですな山へ行つておすもうをとりに行きました。そして皆であそんでゐると何だかくんくんなくこゑがきこへますから、皆なでさがすと石の上のきれくづの中に子犬が一匹はいつてゐますから、そのきれを取つてもつていつて皆でおはしをだしてぎうにちを買つて、のませましたらあいしそうにのんでゐる間に、犬小屋

本所區

三七一

をたててやりました。又ぎうにうをのませるともう日がくれましたから小屋にいられてやつて歸りました。朝起きて犬をおこしてうんどうをさせました。又小屋にいられて學校に行つて歸つてきてぎうにうをのませてやりました。そうして毎日かはいがつておきました。或日のぶさんのうちに連れてきてよその人にこの犬は男ですかとききましたら、女ですといひましたからすぐぎうにうをのませてすてしまひました。この犬がおしんの時の大かじでしんだかいたかわかりません。そのはなしをはじめるとほんとうにかはいそうになつてしまひます。

うちに歸るより先に學校へ

本所區 江東尋常小學校

第三學年女

小松 富美子

私は地しん後しばらく尾久に居りました。昨年十月相生町にばらつくが出来て、お父さんやお母さんや皆と一所に焼あとに歸つて來ると、第一番におどろいたのはせんとはまるでちがふあたりの様子、遠くの方まで廣々と見えるさびしいあり様にしせんとなみだが出ました。私がぼうせんと立つて先生のことや友だちのことをいろいろか

んがへて居りますと母さんが、

「富美子や内へはいるよりさきに學校へ行つて來ませう」

と米ちやんをせなかに私といそいで學校へ行つて見ると丁度先生にお目にかゝり。

「明日から其まゝであいでなさいお湯も入れてあげます」

とおつしやつて翌日からしばらくぶりになつかしい學校にまゐりました時は實に飛び立つほどうれしうございました。

この頃のやうす

本所區 二葉尋常小學校

第三學年男

加藤 定吉

この頃はもう家もよほどたちました。又中にはやけあとに花やせんこうの上つてゐるところもあります。それから皆死んでしまつてやけあともかたづけけてない家もあります。私の家の方ではずいぶんしんださうです。その中でよくしつてゐる前のうちはぜんめつださうです。それから二けんおいたとなりの家もぜんめつださうです。それにあさみさんの家はやけないじぶんは六人でしたが今ではおじさんとおばさんだけで

す。そんな内はどんなだらうと思つてゐます。私のうちは今二葉バラックのりの二に居ます。おとうさんとおかあさんとおとうとと妹と五人です。私は學校からかへつてから三つになる弟をあそばすのがやくでございませう。それから夕方つかひにゆくのがやくです。私の家に二人入つて來ました。それでねるのにせまくてこまります。そのおばさんとうちのおかあさんときがあひません。それからうちのおとうさんとそのおぢさんとよくきがあひます。

ばらつくの家

本所區 二葉尋常小學校

第三學年女 竹 内 君 子

大地しん大火事にあつた、私どもの家やそのほかの家はみんなばらつく家でありませう。その中でもこまつてゐる家では皆おもてだけ板でつくつてあります。それから家の中には紙をはり、又ぼふる紙で板をはつてあります。皆人は寒さうなかほをしてあります。中でも一枚板をつかつてあるのはふし穴があいてそこから寒い風が吹いてきますから家の中は寒うございます。それから屋根は皆とたんではつてありますから雪

やしもがおちると水になつてとたんにしみて家の中にぼた／＼とたれてきます。その中に居る人人はどんなにこまることせう。

内ノ鯉

本所區 茅場尋常小學校

第三學年男 三 原 勝 幸

僕の内ノ鯉はとてもはしこい魚です。

水をとりかへるときははしこくて／＼とれません。わたくしが水をとりかへるときかめのふちのさきをもつたので、ばちんとわれたひやうしにわたくしはばたんところびました。それからうちのおつかさんがきておこりました、やつとつつかまへたら鯉はよろこんでいせよくおよいでゐました。おとといのあさみたらこほりがはつてゐて一ばん大きいのがしんでゐました。わたくしはかはいそいでたまりませんのでなきたくなつたのです。まだいきていたのはわりあひに大きいのでまあよかつたとおもひました。小さいのもまだたくさん生きてゐましたのでよろこんでゐます。そのちたび／＼水をとりかへてやりますからじやうぶでいます。